

ウィリアム・モリスと彩飾手稿本『詩の本』

蛭川久康

◆はじめに

ウィリアム・モリス（一八三四—一八九六）における書物芸術といえば、だれしもケルムスコット・プレスを想起するであろう。が、じつは本論が取り上げる『詩の本』（*A Book of Verse*）は、この私家版印刷工房によって成し遂げられた一連の「理想の書物」群に二〇年あまり先行したモリスの仕事だった。完成は一八七〇年春、モリス流儀に則った仲間との協働の成果として仕上げられた。小冊ながら、このうえなく精緻・美麗をきわめた、宝石のような自撰詩集である。モリスの書物芸術の領域における先駆けとなった記念碑的作品であり、モリスが試みた最初彩飾手稿本である故に、それはモリスによるカリグラフィ活動の宣言の書、あるいは新分野への挑戦の書ともなった。はじめて手にする時、だれしも予期せぬその静謐な詩趣に囚われるのではなからうか。

考えてもみれば、ウィリアム・モリスは、ラスキン（一八一九—一八八二）の到達点を出発点として始動して以来、絶えず変容をみせながら、時には後退を思わせないではなかったが、一貫して芸術家であり、文明批評家であ

り、社会活動家であるような統合的主体としてあり続けたのだった。だから、『詩の本』の出現は、一見不意の出来事のように思えても、この新事業への挑戦は、長い時間をかけてモリス自身が熟成を図ったことの成果であった。そして『詩の本』をはじめとする彩飾手稿本の達成が、こんどは後のケルムスコット・プレスの発足につながったが、それはいかにもモリスらしい見事な連鎖と見ることができる。

モリスが彩飾手稿本と取り組んだ時期は、後にも先にもその生涯の一八七〇年から始まる五年間だけである。『詩の本』をはじめとする、この時期に属する一〇余点は、後に続くケルムスコット・プレス全五三点のためのいわば実験とか試作などという二義的位置付けにはなじまない。手書きによる一冊一冊が一点かぎりの書物であることによつて、複数の増刷を容易にゆるす活字印刷本とはまた別な書物群として特別の関心の対象となるに十分である。

たしかに量的には及ばないとしても、質的には、つまり芸術的完成度において、彩飾手稿本は決してケルムスコット・プレス刊本に劣るものではない。「手書き」であること、つまり一点だけの存在というその特質からは、製作者の美的追及の熱度において、ケルムスコット・プレス刊本を凌駕するのではないかさえと思わせるものがある。印刷工房の刊本はあくまで印刷本である。手書きから印刷へ、それは一八七〇年頃までにモリスが磨きあげてきたはずのカリグラファーあるいはタイポグラファーとしての力量・感性にさらに磨きをかけた段階で、はじめてモリス独自の活字書体が創出され、優れた印刷業者と出会うという幸運にも恵まれて、活字印刷に成功したのだった。『詩の本』を中核に築き上げられたモリスの彩飾手稿本の世界は、従来ともすれば、ケルムスコット・プレス刊本の完璧と華々しさの陰にかくれて、不当に等閑視されてきた虞れなしとしない。以上が『詩の本』のもつ第一義的意義。

『詩の本』はもう一つの見逃せない問題を提示する。モリスは、この「宝石のような書物」をバーン・ジョーンズ夫人、ジョージアーナ（一八四〇—一九二〇）の第三〇回目の誕生日に彼女への贈り物とした事実がそれである。一体、このことはなにを意味するのか？ この事実によって『詩の本』は「宣言の書」、「挑戦の書」であることから、一挙に個人色の強烈なきわめて暗示的な一書に変容する。贈る者と贈られた者の共犯関係を思わせる「問題の書」とさえみなされる。モリスとジョージアーナとの間にながあったのだろうか？ その時、親友バーン・ジョーンズ（一八三三—一八九八）はどうしていたのだろうか？ そしてもう一人、モリスの妻ジェイン（一八三九—一九一四）はどうしていたのだろうか？ この二組の、生涯を通じて親友であり、美談に事欠かない友情を持続させた希有な関係として知られるモリス夫妻とバーン・ジョーンズ夫妻になにが起こっていたのだろうか？

具体的には、モリスと人妻ジョージアーナの関係、画家バーン・ジョーンズと人妻マリー・ザンバコ（一八四三—）との関係、さらにダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ（一八二八—一八八二）亡き後ジェインが陥ったウィルフリッド・スコーエン・ブラント（一八四〇—一九二二）との第二の「親密な関係」という、運命的な人間関係をめぐる問い掛けであるが、その結節点にあるのがほかならぬ『詩の本』である。

本稿は以上の諸問題を、次の三つの表題の下に、『詩の本』が提示する、予想をこえた広がりとお興行きを明らかにして、モリスの晩年を考察する。

「ウィリアム・モリスと自撰詩集『詩の本』」……………4

「モリス夫妻とジョージアーナ・バーン・ジョーンズ」……………21

「モリス夫妻とウィルフリッド・スコーエン・ブラント」……………49

◆ウィリアム・モリスと自撰詩集『詩の本』

ずっと以前から、父はフランスとイギリスの中世絵付き手稿本に深く親しんで、ポドリアン図書館や大英博物館の最高に美しい蔵書を自分の本であるかのように熟知していました。それどころか、これ程楽しい思いをしているのだから、自分の蔵書そのものだ、とよく笑いながら言っていました。バーン・ジョーンズと一緒に大英博物館の写本部門で幾時間も楽しい時を過ごしたのです。あの若さで父ほどその宝物に親しんだ者は、写本部門の係員を別にすれば、ほかにだれもロンドンにいなかったと思います。

モリスの彩飾手稿本に対する関心について、娘のメイ・モリスが記した言葉である。¹⁾ こうした学生時代にさかばる関心が本格化したのはモリス一家がクウィーン・スクエア二六番に住んでいた一八七〇年頃からであった。その後ホリントン・ハウスで過ごした時期にも、この関心は途切れることなく持続したのだった。とはいえ、商会の仕事が多忙をきわめると、おのずと「この静謐で思索的芸術」から遠ざかることになり、多方面に活動する父にとって、この新領域は「間違ひなく寛ろぎの日曜日の上ない心休まる楽しみ」になったのだという。

それにしても、中世の筆写と彩飾の技を一九世紀後半に蘇らせるのは生易しいことではなかったはずである。印刷術の発達がこの領域の再生に不可欠な諸条件を時代から完全に奪ってしまっていた。筆記用具にしたところで、伝統的な羽根ペンは鋼ペンに取って代わり、用紙についてもヴェラムばかりを使用するわけにはいかず、紙を用いれば、風合いがまるで違った。それにインクの質も変わってしまった。モリスは職人として安易な妥協や真似事を嫌って、神経質なほどに原型・原質にこだわった。後のことになるが、ケルムスコット・プレスの三活字体、特注

手漉き用紙、ドイツのヤーネツケ商会の黒インクなどへの拘泥はその好事例である。時代の流行はゴシック・リヴァイヴァル、だが、モリスは無節操な便乗を遠ざけた。ステンドグラスや染職においてそうだったように、まず過去の優れた実例を徹底して観察・吟味し、文献に歴史を学び、ようやく実作に取り掛かり、しばしば共同作業によつて成果を得た。そして最後に作品とは別に講演や論文の形で仕事の要諦を記録として残す。これがモリスの流儀だった。書物芸術についても、こうした一連のモリス流儀は踏襲された。

モリスの中世彩飾手稿本の体験は、メイの言う「ずっと以前から」、つまり大学生の頃のボドリアン図書館や大英博物館での体験とされるが、後にその時の衝撃を、モリスは次のように書いた。「少年の頃、カンタベリ大聖堂の堂内に入った時のことを覚えています。天国の門が開かれたような気がしたのです。同時にそれは初めて彩飾手稿本を見た時と同じ経験でした。こうした初めての、自力で見つけ出した喜びは、以後経験したなによりも強烈でした」と。あまり知られていないことだが、「衝撃を受けた」青年モリスは、早くも一八五六年といわれるが、彩飾手稿本に挑んだ。この時はあくまで試作の域を出なかったが（当然である）、五六年と確定できる三葉が現存する。うち一点に、ロバート・ブラウニング（一八一二—一八九）の長詩『パラケルスス』（一八三五）を題材にした一葉がある。この劇詩は演劇界から高い評価をえて、ブラウニングの名を文壇に知らしめた出世作だが、主人公パラケルスス（一四九三／四—一九四一）は波乱に富む四八年の生涯を遍歴のうちに送ったスイスの医学者・化学者だが、医学書、錬金術書のほかに哲学・神学関係の難解・膨大な著作を残した知の巨人として、しばしば「医学のルター」と称された。

この一葉はモリスの中世後期の手稿本に対する強い関心を示して、モリスの「書物芸術」を予示するものとしてはなほだ貴重である。書体はゴシック、例えば頭文字のAとHはそれにつづく詩行と不釣り合いなほどに大きな装

飾文字、左右の余白を埋める縁飾りは奇怪に引き伸ばされた胴と尾をもつ仮想動物で（長い胴が一見蛇を連想させる）、それが詩句を囲むと、その効果は中世写本の世界そのものが現前する。それにしても小さくぎっしり緻密なゴシック体で書かれた、いや描かれたといいたいほどのブラウニングの詩句は、いささか読みにくい^②が、文字までが装飾性を獲得した、なんと精巧・精密な出来栄えだろ^③う。テキストと装飾は晩年にみられる見事なコラボレイションからまだ遠く隔たつてはいるものの、カリグラフィーに関する限り、モリスはすでにただの真似事でない、技を極めた職人芸に達していることは誰の目にも明らかである。ロセッティは一八五六年二月一日付ウィリアム・アリンガム宛の長文の手紙のなかで、「モリスは建築家になるつもりでいる、その目標にむかつてすでに画家の修業をはじめ、上達の最中である。彩飾稿本とその種の仕事のすべてにおいて、私の知る限り、当代のいかなる者も彼に肩を並べる者はいないーラスキンは古い時代のどんなものより良いとさえいつている」^④

メイ・モリスは、「以下が完全なリストだ^⑤と思う。ただし全点が計画通りに完成されたわけではない」と断りながら、一八七〇年の『詩の本』から一八七五年の『アエネーイス』^⑥にいたる手稿本の全仕事、一三点を列挙した。うち未完本は五点、また七点がアイスランド・サガの翻訳だった（F・マッカーシーは別に一八点とする^⑦）。ほかに断片的ながら多数の試作を心掛け、全体量は一五〇〇ページを越すという。またジョン・ナッシュは、同じ期間に二二点ほどの彩飾手稿本を手掛けたとしながらも、「うち完成したといえるのは二点だけ^⑧」という。さらに一九三四年にヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で催されたモリス生誕百年記念展のカタログによれば二五点である。これほどまちまちなのは、おそらくモリスが書物というまとまりのあるものから、ばらばらの紙葉^⑨まで、さまざまな形を試みたからであろう。いずれにせよ、モリスの彩飾手稿本は一八七〇年の『詩の本』から始まった。そして金泥を豊富に使用した絢爛豪華なヴェラムによる『オマール・カイヤームのルバイヤート』

（一八七二年―本書もジョージアーナに贈られた!）と『ホラティウスの頌歌』（一八七四）がつづき、一八七五年には『ウエルギリウスのアエネーイス』が掉尾を飾った。その間、数点のアイスランド・サガを題材にした手稿本が製作された。

製作にあたって、モリスが手本にしたのは、その蔵書から類推すると、一六世紀のイタリア・ルネサンス期の筆記手本書、『ペン先によるカッティング法』（ルドヴィーゴ・デッリ・アリーギ著）、『筆写人のための宝典』（ウーゴ・ダ・カルピ著）など四点のカリグラフィーに関する書籍であると考えられる。四点はいずれも、当時のイタリア社会で公的文書を作成するための専門家を対象にした教則本・手本書の類で、モリスが所持していたのは（入手時期は一八六四年頃と推察されるが不詳）、緋色のモロッコ革装の分厚い四冊合本であったという。その頃、知遇をえた出版社経営のかたわら稀覯本販売にもたずさわっていたF・S・エリス（一八三〇―一九〇一）の助言もあっただろうが、いかにもモリスらしい真面目そのものの正攻法である。モリスはアルファベット文字の千変万化する実相を目の当たりにして、その豊かな装飾性を直感し、魅了され、書物芸術への確信を深めていったのではないか。

一〇点前後の彩飾手稿本とケルムスコット・プレス刊本全五三三点の美麗本は、二〇年ほどの長い歳月を隔てて、輝かしい二つの書物群を形成するが、ともにモリス後半生における画期的業績であることに変わりはない。

さて、各論に移ろう。

まずオマール・カイヤール著、エドワード・フィッツジェラルド訳『ルバイヤート』（一八七二―図1・8ページ）。モリス没後一〇〇年を記念した空前の回顧展（一九九六年五月―九月）に呼応して出版された『ウイリアム・

図1 『ルバイヤート』1872. ヴェラム、水彩、金箔。13.5×23.5 cm（見開き）。モリスが唱える見開き1単位のルールが活かされた好例。ジョージアーナに贈られた1冊。のち彼女は英国図書館に寄贈した。

モリス』に、この手稿本の見開き二ページがカラー図版で載っている。さして大きくない図版だが、『ルバイヤート』がいかに豪華本であるかを知るに十分で、驚きを隠すことができない。見開きが一単位というモリスの紙面作りのルール（後述）に則りながら、全体は豊潤な装飾によって埋め尽くされ、均衡ある心地よさを醸し出している。その感興はピザンティンのモザイク壁画に、例えばラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂内で対面した時にどこか響き合うように思われる。

メイ・モリスは『ルバイヤート』を評して、「玉石のような書物で、縁一杯まで装飾されたページがまじって、花々は一風変わった真実らしさと優しさで描出された。緻密な一二葉の仔羊皮紙ページを想像してみてください。小さなページは全巻を通じて冒頭が金文字に飾られ、どのページも花と果実と精妙な人物

像が密に精細に描かれた装飾に埋め尽くされています。薄い小さな本ですが、月並みなあるいは名もない花はひとつとしてないと思います。スイートピー、スイカズラ、ヨウシュトリカブト、オダマキ、セイヨウサンザシ、アオリリヂサなどが目に入る、他にも沢山のなじみ深い花々があります。信じられないほど自然のままに、信じられないほどに調和して、花壇が書物に変わったのである。この職人芸は熟達と繊細さの度合いにおいて批評を越えている。人物像は父とバーン・ジョーンズの下絵をもとにC・F・マリーが彩色した」と完璧なまでの所見を記した。この「宝石のような書物」をモリスはジョージアーナに贈る。いや、宝石以上の贈り物である。そのことの検証は後述にゆずる。

次に『ホラティウスの頌歌』（一八七四）はモリスのイタリック体による筆写と精緻な飾り文字の頂点をさわる傑作で、モリスのルネサンス書体の研究の成果を遺憾なく発揮した代表作といえる。一八三ページに及ぶテキスト部分はすべて書き上げながら、装飾をわずかに残したままで作業が途絶えた。そのことによってメイは本書を未完とする。なお装飾の一部に個人的には技巧過多と思われる点がないわけではないが、それがバーン・ジョーンズとチャールズ・フェアファックス・マリー（一八四九—一九一九）の両人が装飾の一部を手掛けたこととどこまで関係あるのか明らかではない。

次に『アエネーイス』（一八七四—七五）はローマン小文字体の頂点を極めるものだが、一七七ページまで、これも未完に終わる。未完部分の文字と装飾はフェアファックス・マリーら友人・知人が完成させた。それにもかかわらず、「この作品は素晴らしい継続的努力の成果であり、モリスの意図どおり、彼のカリグラフィの一大傑作となっている」とジョン・ナッシュが述べるように、一般に評価はきわめて高い。なおこの稿本の縁飾りにアカンサスの葉がモチーフとして登場することを書き添えておきたい。これはやがてケルムスコット・プレス刊本に

受け継がれていくモチーフであるのだから。メイ・モリスは上記三点について、身量肩でない次のような所見を記した。「一覧表の最初の六点の手稿本は輝くばかりの細密な装飾の点で重要である。そしてその頂点が『アエネーイス』である。筆写の美しさとパリパリした感覚と自由によって、この作品は、未完にもかかわらず、注目すべき手稿本のひとつに数えられるのである。六点すべてに実にさまざまな創意と手法が明らかであり、それだけでもこの方面の技芸に通じている者の目には特別な価値がある。金文字と風格ある鮮明な書体と多数のバーンジョーンズの絵に飾られた『アエネーイス』と歎びと生気にあふれ宝石のような魅力的な『ホラティウス』と並べると、その対照的なことは清新な驚きである。同じ一人の頭脳の仕事でありながら、異なる雰囲気の結果した。『詩の本』はそのいずれとも異なり、書物装飾の嚆矢となった」。

『詩の本』(A Book of Verse, 一八七〇、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、279 × 216 cm — 図2・12ページ) はアイスランド伝説の翻訳詩をふくむ短詩二五篇から成る、わずか五一ページ、ただし「目次」、「奥付」などをふくめると全六四ページの自撰詩集である。モリスは共同制作を試み、詩に寄り添う彩飾画、詩行とページの余白を飾る植物文様を仲間の手にゆだねた。とはいえ基本はあくまでモリスの着想である。制作にかかわったのはエドワード・バーンジョーンズ、チャールズ・フェアファックス・マレー、ジョージ・ウォードルという三人の常連であった。マレーはロセッティ、モリスの友人で、画家、美術品収集家であり、一八七〇年頃主としてステンドグラスの作画を通して商会と関係を結んだ。「馬力のある青年で、仕事は誠実、協調性にとみ、ちょうど父の目が商会の作画室の隅々にまで行き届かない時期で、まことに得難い人物だった。手紙で分かるように、父はこの青年をなにかと頼りにしていた」とメイは記した¹⁾。ジョージ・ウォードルは、ウォリントン・テイラーの後をつ

いで商会のマネジャーを務めるかたわら、図案・挿絵画家として活躍した信頼できる仲間だった。「長い間父の右腕的存在でした」とメイは回想する。⁽¹²⁾

『詩の本』の題扉には A BOOK OF VERSE / BY / WILLIAM MORRIS / WRITTEN IN LONDON / 1870 の文字が緑の枝葉（柳の葉であろうか）の中に刻まれて、中央に詩人の横顔が配され、花咲く格子垣を背にして、中世の吟遊楽人に擬した四人の女性像が古楽器を奏する。この楽音は反復のうちにも幾多の変奏を経て最終頁へとつながる。通底するのは、壁紙の習作期にわれわれが確認できたあの「臆面もない自然主義、自然と様式のこの上ない絶妙なバランス」であり、壁紙の特質がここに文学と絵画の共存、コラボレーションという新たな意匠のうちに再現された。

モリスの詩句は、題扉から最終の五一ページまで、手書きの一六世紀イタリア写本に倣ったローマン書体で綴られる。縦線が太く、横線が細く、なおかつ起筆部と終筆部にセリフ (serif) とよばれる小突起線が特徴で、造形的にも紙面にリズムをあたえる効果がある。紙面は多彩な素朴な植物文様に彩られるが、最初の一〇ページは、すでに指摘の通り、ジョージ・ウォードルの担当、それ以降のページはウォードルを引き継いだモリスの仕事である。両者の仕事の微妙な差異が、一一ページと見開きであるため容易に見て取れる。両ページとも左部分に大きな余白がもうけられ、色調こそ大差ないものの、一一ページに描かれた花や茎や枝には、壁紙に認められた上方にむかう蔓のごとき「成長の感覚」がある。形状と色調を微妙に変える淡彩の花々と緑の枝葉、それらは結び合い絡み合いながら、詩行を取り囲み、あるいは詩行に寄り添い、さながら花壇や野原や果樹園に詩人の憧憬や詠嘆が研まし共鳴するかのようである。あくまで静的でありながら、林を吹き抜ける風の感触であろうか、なにかが流れているという微動の感が漂う。こうした詩趣はもっぱら詩の領域に属する感興である。気がつけば、装飾は詩に接近してい

図2 『詩の本』題扉。アイスランド・サガの翻訳詩をふくむ自撰詩集。紙、インク、水彩、金箔。27.9 × 21.6 cm。奥付に1870年8月26日の記入。

図3 『詩の本』 第19歌「息子の悲嘆」(部分) 詩行と挿絵の融合を図ったモリスだったが、O. ワイルドなどから装飾過多の疑問が呈された。

るといふことなのであろうか。

詩集の題扉には、モリスの横顔を描いた円形肖像画が掲げられた。これはモリスの写真を下敷きにマレーが描いたもので、今ではモリスの肖像を代表する一葉となつてゐる。写真は三六歳のモリスを真横から写した、前方を直視する生真面目な肖像である。ネクタイに背広姿、トレードマークの豊かな頭髪と顎髭が印象深い。モリスのマレー宛ての六月一三日付けの短信が残り「明日、火曜日、写真家のパースンズの所へ写真を撮ってもらいに行くつもりです。ご一緒しませんか、それとも先方で落ち合ひしましょうか。遅くとも一一時には先方に行つています」。モリスはこの時の写真が気に入つたらしく、マレーにこれを下敷きに肖像画を依頼したのだった。「二三歳の時撮つたダゲレオタイプの昔の写真を別にする、わたしが知る限りもつとも古い父の写真」⁽¹⁴⁾であり、メイは著作集第二巻の巻頭にこの父の写真を載せた。

また、こんな手紙もマレーに書いている。「四季の下絵の候補を探していますが、胸をあらわにした「春」なんかでいいんでしょうか、皆目見当がつかみません。なにか別な絵にしなければ駄目でしょう。でもきつと小生の詩にぴつたりのが見つかると思います。近く拙宅へおいでくださいませんか。その折り、他の彩飾画についても相談したく思います。できれば今月中に仕上げられれば、ありがたいのですが」⁽¹⁵⁾と書いて、『詩の本』に収める四季を表現する四人の中世吟遊楽人の女性像について相談をもちかけてゐる。追伸に「彩飾画は出来上がるまでだれにも見せないでください」と念を押すなど、モリスの仕事ぶりはあくまで慎重である。贈呈する相手のことを意識してのことと思われる。結局、胸を半分あらわにした緑の着衣の「春」に落ち着いた。『詩の本』のため、マレーは、巻頭を飾るモリスの肖像画以外に、全部で一六点の彩飾画を描いた。

表紙は栗色のベラム（仔牛皮紙）で、花をモチーフにした金の浮彫細工によって裝飾され、表、裏の両表紙中央

には花輪のなかに「G.B.」のイニシャルがやはり金の浮彫細工によって刻まれている。

奥付コウブキによれば、題扉の装画はバーン・ジョーンズが、他の彩飾画はすべてマレーが担当したと明記され、「ただし、四〇ページの『春』、『夏』、『秋』の三人の女性像は小生の下絵からマレーが仕上げたもの」。四〇ページには短詩「時の移ろい」が書かれ、次ページの「引き裂く夏」とともに全巻中もつとも繊細にして優しげな空間を構成する見開きのひとつが完成された。モリスの考える見開き一単位というルール（後述）がはじめて実行に移されて、その満足できる実効を確信することができた。植图文様については、やはり奥付で「ジョージ・ウォードルが最初の一〇ページの装飾全部を下描きし、それに小生が賦色した。また大小を問わず色文字はすべて彼が担当し、他の装飾一切と詩句などをふくむ文字のすべては小生の仕事である」と、また「クリステイヌのバラッド」と『息子の嘆き』の二篇はアイスランド語からの翻訳である」とわざわざ断った。さらに奥付にはモリスの署名とともに場所と日付けが、ロンドン、ブルームズベリー、クウイーン・スクエア二六番、一八七〇年八月二六日と明記された。

この奥付についてはさまざま憶測がなされた。協力者に対する謝辞を意図したと考えるのもいいかもしれない。きわめて個人的であるはずの詩集としてはいささか奇異に思える。もともと印刷や販売のつもりがなく、純粹に贈呈用に手書きによって仕上げられたとすれば、奥付がなくて普通である。奥付の趣意は手紙で伝えることも、会った機会に直接話をしてもそれで済むことである。ただモリスが、将来の商業的需要を見込んで、それに備えて制作上のデータを記録に残したとすれば、話はまた別である。それに、翻訳詩二篇はその旨わざわざ断った裏には、俺ならこんな詩は書かんど、とでもいいかげん自負があったのではと受け取ることもできよう。ロジャー・マイルズは「ジョージ」「ジョージアーナの愛称」のために個人的に綴られたものではなくて、あたかも『詩の本』がいづれ

商業的あるいは社会的にきわめて高価な垂涎的となることを予測して、まごうかたなき贈物の一点であることを保証しようとした伝票のごとき意味合いがある」と述べたが、案外モリスの真意を突いているのかもしれない。⁽¹⁶⁾

というのは、モリスはとくに『詩の本』に後々までも強い執着をもちつづけて、ケルムスコット・プレス設立の年、同工房の刊本第一号『輝く平原の物語』に続く第二号として、ただし書名を『折りふしの詩』(Poems by the Way)⁽¹⁷⁾と変更して、いわば「復活」させたからである。復刊本は『詩の本』所載の詩をふくむ、一八六八年から九一年の間に作った四九篇をまとめて、印刷・販売に踏み切ったのである。二〇四頁、活字はゴールドデン・タイプ、初の二色刷り、初の工房のロゴ・マーク入りなど、モリスの意気込みのほどが明白である。ヴェラム刷本二三部、それに紙刷り三〇〇部を作り、奥付に一八九一年九月二四日と日付を入れた。

次にモリスの書物製作について基本原理を、具体的に『詩の本』から、見開き四〇ページと四一ページを取り上げて、考えてみよう。すぐ目につくのは、ページに占める版面の位置である。現在普通に行われているのは上下と左右の余白が均等になる割付けである。しかし、モリスは版面をページ中央に置かない。つまり、下部「地」と外側「前小口」の余白を上部「天」と内側「のど」の余白より広く取ることが、「自然な均整の感覚」に適うとした。⁽¹⁸⁾こうして、版面はページのやや中寄り、やや上に位置することになる。両ページとも、詩行を左寄りに配し、右側に生じた余白部分を素朴な描法による縁飾り―淡青色の小花を咲かせ緑の葉群に覆われた蔓状の小枝―が埋め、それはさらにスタンザとスタンザの隙間にも広がる。四〇ページに装飾画が配されれば、四一ページには各スタンザ冒頭の一文字が飾り字体となる。

もちろん、こうした構成はこの見開きに限ったことではなくて、『詩の本』の基本原理として採用される。モリ

スはテキストと装飾の一体化を図る。モリスの言葉に耳を傾けよう。⁽¹⁹⁾

装飾が、なんであれ、絵であれ文様であれ、記憶に留めるべき要点は、それがページの一部分を形作り、書物の全計画の一部となるべきであるということである。提言は単純そのものではあるが、念を押しておかなければならないのは、近頃のやり方が印刷と装飾の相互関係を完全に無視するからである。だから、もし両者が相互に助け合っているとしたら、それはただの偶然にすぎない。印刷に携わった昔の人々は文字と絵その他の装飾との正しい関係を完全に理解していた。だから、木版画がひどく粗雑であっても、なお文字と版画が一体となって伝えてくれる豊かさが喜びをもたらすのである。……そこで、巧みにデザインされた活字、しかるべき行間と語間、それにページ上に適切に配置された版面があれば、すべての書物はすくなくともこじんまりと感じのよい、見た目にも楽しいものとなるはずである。

モリスはほとんどいつも、壁紙が好例だが、実践が先行していて、その後暫くしてから理論の発表が行われるのである。エッセイ「印刷」(一八九三)で公開した持論はそのまま『詩の本』にまで溯る。モリスはほとんど最初から、美しい印刷、理想の書物に関して、完成された理論の持ち主だった。それに右の引用にみられる、「こじんまりと感じのよい、見た目にも楽しい」という字句は、モリスの美意識の根底にある重要な基準のさりげない表明である。田園の風景、建物の佇まい、壁紙の文様、そして今、書物の姿形について、ずっと以前からの持論の変奏を明示したと考えることができる。

『詩の本』について、「それはさまざまなる素材から創られた『書物』という名の工芸品であり、読む者であり

見る者であるわれわれは、それを構成する異なる要素と全面的に連帯することになる。……装飾はテキストと同じく書物の構想全体と一体をなし、一つは他を抜きにしては考えられない。この一体感はテキストと装飾両方に関わる筆写人の産物であり、したがって完成された書物は彼の労働が見事に統合されたことの証しなのである」⁽²⁰⁾、と核心に触れたのは R・マイルズだが、『詩の本』の放つ喚起力に言及して説得力がある。

だが一方で、皮肉なことに、小野二郎がケルムスコット・プレス刊本について、「読まれるためというより蒐集するためにあるという一般の批評が生まれるのも、やむを得ないかもしれぬ」と指摘し、あるいは『チョーサー作品集』について、「これは読むためというより、テーパールの上に置いて眺める方がふさう感じである」、とも言い、さらに、モリスは『私の装飾を、活字のページの一部分たらしめる必要をつねに忘れまいと試みた』、といっているが、その抑制を越えたと一般に感じられるものがないでもない」との不満を述べた。小野は『詩の本』はきわめて繊細な美しさをもつが、絵本である、と言いたげである。あるいは寿岳文章の次のような評言を思い出しでもよいだろう。「ケルムスコット・プレス本は決して読みやすくなく、多くは装飾の過剰によって目移りがし、またその黒すぎる反面は読者の頭を混乱させもする。そして必ずしも無条件に美しいとは言えない」⁽²¹⁾。

こんな不満、あるいは欠点を聞けば、筆者にも思いあたる場面がないわけではない。モリスが奥付で翻訳であると断った第一九歌「息子の悲嘆」(図3・13ページ)である。詩は全部で四六行、その全体が三ページに整然と、そしてほぼ均等にゆったりと配され、詩行が花咲く野と果樹園に囲まれた三葉に接すれば、だれしも詩句を楽しむより、装飾の豊かき、繁茂といった方がいいのかもしれない、その過剰とも思える豊饒について目を奪われて、読むことより見ることが先行してしまうのではなからうか。それは読者ないしは見る者の責任ではないだろう。花も果実もじつに色とりどり、多彩をきわめる。このことはなかでも見開きとなる三八、三九ページにあてはまる。

マッケイルは『詩の本』について、「モリスの彩飾本としては最上の出来ではないが、全体としてみれば、最も美しいものではないか。本書によって、モリスは完全に中世の手法と決別して、偉大なウエルギウス (70-19 BC.) の写本の色彩と文様を自らの独創的天才によって変容し再現することに成功した。それでありながら、いかなる伝統にも依存することのない現代性があり、新鮮さがある。……万一装飾手稿本がふたたび民衆芸術のなかにその位置を占めることができるのであれば、それは必ずしも不可能とは思われないのだが、その最も有望な道筋はまさにこの美麗本が提示する方向にあるのだ……最初期のモリスの壁紙にも当てはまることだが、技術的にはより完成された後の彩飾手稿本より、第一作の『詩の本』が素朴さと適合性の点で優れている」と述べた。⁽²¹⁾と、またヘンダースンは「本書のあふれる魅力は二年ほど後に制作される壁紙《ジャスマン》を予告している」、⁽²²⁾と評した。『詩の本』がただ予告にとどまらず、詩人モリスとデザイナーモリスのいわば協働の成果であることにこそ、その真骨頂があるといわねばならない。

メイ・モリスは、ウィリアム・モリス著作集、第九巻の序文で、『詩の本』について「葉や花を淡彩に軽やかに描き、完成度の高い人物像を緑の枝葉の間に配し、それらが素早い精緻な褐色の筆の運びのうちに絡み合う装飾を完成させた。……この詩集は、バーン・ジョーンズ夫人の誕生日という慶事にあわせて数週間うちに用意された特別目出度い一書であつて、華やかな瑞々しい各頁には素朴な情感があふれる」と述べ、⁽²³⁾「輝くばかりのきらめきとこまやかな装飾の点に意義がある」と評した。また、それとは別に、少女期のメイにとって、父の仕事場のテールはワンダーランドそのものだったらしい。

もちろん、作業台の上の絵筆一本動かしたり触れたりするなんて夢みたいなこと、ただ眺めるだけでした。台の上には、中国産の特性インク棒（必要になると、すりつぶす作業がわたしに回ってくるのがよくありました）、貴重な顔料であるウルトラマリンの使いかけのちっぽけな塊、貝殻に入ったうす金の絵具などがあって、それに本には金色の葉っぱがはさんでありました。それを見せてもらうには、ちよつとでも空気が乱れて脆い金の輝きを台無しにしてしまうといけないので、わたしたちは直立不動の姿勢をとって息を止めなければなりません。……家具の少ないがらんとした明るい部屋、質素な作業台、金絵具の上に屈み込む堂々とした頭と巻き毛の束が絡み合わんばかりにくつつき合った二つの幼い頭。……それから美しい白のヴェラム皮紙や小ぎれいで繊細な絵筆の数々、驚ベンから細字用のカラスの羽根ペンまでさまざまなペン、見事に鍛えられたいろいろなナイフ、優雅な定規やコンパスなどなど、この愛すべき技芸になくはならぬたくさんの物たちがそこにあつて、その全部がそれぞれに美しく用途にふさわしく、疲れを知らぬ手が自家薬籠中の物とすることに、わたしは思わず感嘆の声を上げるのでした。⁽²⁶⁾

メイの観察眼のたしかさよ！ おとぎ話の一片に通じる純な眼差しがある。さらにメイの魅力的な言葉に耳を傾けよう。⁽²⁷⁾

父は例外的に忍耐力の強い人でした。人間相手では必ずしもそうでなかったかもしれないかもしれませんが。もちろん目的のための手段として物を相手にただ闇雲な根気のみせるというのではなく、気晴らしということを得ている人でした。父のがっしりした大きな手が針の先程の五つの点で小さな花を成り立たせながら、半インチほど

の四角形の金紙を埋めていく作業を眺めたことがありますが、すこしでも手元が狂えば不揃いや汚点となるのに、いとも容易くしかも正確に、まるで一生筆を握り続けた中国の工芸家を思わせる技量で花を描き切るのでした。

敬愛する父に寄せる優しい娘の心情がうかがわれてまことに微笑ましい。(それにしても母ジェインについて書かれた文のなんとメイに少ないことか！)

◆モリス夫妻とジョージアーナ・バーン||ジョーンズ

彩飾手稿本『詩の本』は、一八七〇年前後におけるモリスの芸術上の営為とジェインの夫という私人モリスの他人には知られたくない心情を表白した問題の一書である。

モリスは、先述したように、この美麗な自撰詩集を盟友エドワード・バーン||ジョーンズの妻ジョージアーナに捧げた。三〇回目の誕生日を迎えた彼女への贈り物だった。それだけではない、この時期に矢継ぎ早に手掛けた稿本のうち、完成させた少数の、しかもメイ・モリスが極上の出来栄と見做す完成品を、G B Jのイニシャルを添えるなどして、ジョージアーナに贈った。『ルバイヤート』をはじめ、自ら訳した中世北欧叙事文学『ヘン・トリールの物語』(一八七四年頃)などがそれで、手掛けた全一三点のうち掛け値なしに最上・最高の部分である。モリスの彩飾手稿本への強い製作意欲とは別に、ジョージアーナに対するただならぬ執心がうかがわれる。まだモリスが学生時代、ロイヤル・アカデミ展の会場で、バーン||ジョーンズ夫人となるずっと以前のジョージアーナ・マクドナルドをたまたま知人から紹介されたのが、二人の出会いだったのを思い出す。その付き合いは長い。長い友情

の証しとしての贈り物？ それとも……？

一八七〇年前後、モリス夫妻とバーンズ・ジョーンズ夫妻、二組の結婚生活に罅が入り始めていた。モリスからいえば、ジェインがますますロセッティと親密の度合いを深めていたこと、一方ジョージアーナからいえば、夫が美貌のギリシヤ女性マリー・ザンバコとの情事にはまりこんだこと、それぞれが、気がつけば、家庭生活の危機に直面していた。とすれば、この時期、モリスとジョージアーナの二人がたがいに裏切られた思いと同情と慰めを求めながら親密の度合いを増していったとしても、なんの不思議もない。モリスは対象をただひとりジョージアーナに見据えて純一に詩作することが、おのれの「地上樂園」であることをすぐ発見した。公開もましてや印刷も予定しないところで綴られた「報われない愛」のいわば私的詩行が、モリスが予想もできない後世のファクシミリの技術によって世界に流布したのは、モリスの人生の皮肉だった。

一八七〇年の夏、ジェインとロセッティの関係は、ケルムスコット領主館において一つの帰結点に達した。裏を返せば、モリスの「挫折と敗北」の痛々しさが頂点に達した時期である。意識的に領主館から遠のき、二度のアイランド旅行を試み、『詩の本』をジョージアーナに贈りながら、おそらく痛手を癒そうと悪戦苦闘している時に、ケルムスコット村ではロセッティがテムズ河畔でジェインと過ごす田園の夏を謳歌していた。以下はロセッティの田園詩の一節。¹⁾

ホームズコートからハーストコートまで

風が川面を走る

そよ風を受けた木々の囁き

冷たく優しいさざ波

両岸のあいだで愛が小声でささやかれ

陽気な笑いがさざめき渡る

櫓を漕ぐむきだしの白い腕

昨年の五月の最初の日

皮肉にも、『詩の本』所載の第一歌「川の両岸で」は、若者と娘が川に隔てられた愛のもどかしさを嘆き合う。その詩趣をバーン・ジョーンズの装飾画が高める。「優しいさざ波」や「愛の小声」にかわって、若者が慨嘆するのは「白い冬」の無情であり、浅瀬を渡る娘は、「濁流」に阻まれて、岸辺から両手を差し出す若者の手に届きそうで届かない。恋人たちの声が問答歌のように交わされ、あたかもリフレインのごとく若者の口から発せられる、それは「憧憬と希求」。「おお、燃える太陽よ、おお、不安の支配者よ／鳥が空巢の傍らで眠っているこの時に／なに故われわれは最善のものをこんな思いまでして投げ捨てなければならぬのか」。娘は「急流」に、「灼けつく太陽」に、「国王」、「堅固な市門」、「暗闇」にむかって、「これ以上どうして二人を分け隔ておくことができようか」とリフレインの叫びをあげる。そして「ああ、愛する人よ、独りでいることの、そのつらさよ」で終わる。若者が発する言葉は三行と四行から成る二つのスタンザ、それに応える娘は四行の一スタンザ、計一行が緩やかな一問答となつて、これが八問答、全八八行からなる、モリスの心情を転写した詩である。モリスが流れに隔てられた両岸をかなわぬ希望や願望を人生の苛酷さに譬えるのは珍しくない。後に社会主義者として社会参加に身を投じようとして、決断のつかぬままに、行く手に立ち塞がる巨大な障壁を「火の川」と呼んだことはよく知られてい

る。⁽²⁾

第六歌「報われた愛」も同工異曲、「引き裂かれた時間の苦痛」を耐え忍ぶことを基調とする。やはりバーン＝ジョーンズの筆による、たつぷりした余白に描かれた挿絵―青いドレスの金髪の女性が濁った流れの対岸に立つ恋人に両手を差し出している―にもそれは明らかである。苦痛を離れた心の安らぎは「眠りと死」にしかないようである。しかし、「その眠りさえ／強い思いを少しもかなえてはくれない」。ならば、「目を覚まして／優しい恋人をかたわらに見ることこそ甘美／唇を合わすことこそさらなる甘美／満たされぬ思いを／心が隠してこそ最上の甘美」と苦痛の中に痛々しい欲びを想う。こうした現実は過去と並置される―「目と手が近づきながら／至福を推し量ることができそうもなかった」過去、「それが失われた夢でしかなかった」過去、「惨めな思いにかさかさ乾いていた歲月／愛はただ死滅するだけに生まれてくるかと思われた」過去が現実と並置される。現在も過去も「報われた愛」の充足感とは無縁だ。「報われた愛」という皮肉な題名が悲嘆と別離の痛々しさを伝える。それは、モリスにとって、虚実のあわいに去来する幻にすぎないのだろうか。

あるいは第一歌「狡猾な愛」―「愛が花咲く美しい庭にわたしを招いてくれた／愛はそこに息づくさまざまな驚異を教えてくれた」。しばし、詩人は死も変化も老齢も恐れはしなかった。だが、そんな眠りから「ついに覚めたとき、強い不安と苦痛があった」。それでも以前に増して「愛の神髄と本質」を知ることができた。同時に、ありとあらゆる恐れを知ることでもあった。ただ一つの恐れを残して。そして最終スタンザ、「おお、愛よ、愛よ、愛よ、お前はなんといいことをしてくれたのだ／……美しい大地はどこへいった、太陽はどこだ／お前は教えてくれなかったではないか／僕のをあの女の目、手、唇が祝福してくれるとばかり思っていたのに！」と叫ぶ。これはジョージアーナをなじった一篇というより、モリスの愛を踏みじったジェインに対する深い嘆きであるように思

える。

あるいは第二三歌「孤独な愛と愛なき死」。詩人は、夏の盛りに闇が迫る気配に脅え、柔らかな夕陽が陰り、傍らに立つ死神の姿に不吉を予感する。そして自問する、「自分のものだつたはずの生活が／探し求めた憧憬が／いま力を失って、消えようとしているのか？／それともすでに永遠に消えてしまったのか？」と。「わたしを縛りつけた愛を縛りつけない／愛がもたらす全てを手放すまいとした／あのひたむきな願望が／無に帰したというのだろうか？」詩人は最後まで苦痛に耐えて、こんな自問自答をくりかえす、「もしもお前が本当にあの女を見かけたならば／もしも手があの女の指に触れたならば／もしもあの女の息づかいを聞いたならば／どんな言葉を口にするだろうか？」、「あの女」とはむろんジョージアーナである。

一転して第一二歌「夏の夜」は恋の逢瀬を謳う——「おお、恋人よ、もしお前に近づく僕の足音が聞こえるならば、その時僕は君の息遣いを聞く思いがするだろう。おお、恋人よ、本当に二人だけなのか？ 灰色の葉が震えている、われわれ二人と月の間で。おお、恋人よ、お前の目に愛が宿る。全ての生き物がそうであるように、今宵もすでに終わろうとしている。お前がやって来た、至福の始まりの素早い終わりなのだろうか？ おお、わが恋人よ、おお、お前の目、おお、お前の手、おお、お前のキス」。これは前掲の詩とは趣がまるで別である。「この詩はジェインとの経験を記録したものとは言いがたい。……おそらく、モリスとジョージアーナが抱擁を交わした夏の夜を語ったものと思われる」とJ・リンジーは判定する。⁽³⁾

やはり当時のモリスの心境に解明の手掛りを与えてくれると考えると考えてよい、こんな無題の詩（一八七二）⁽⁴⁾もある。

聞け、二人は少しずつ、少しずつ

接近した。思うにわたしの焰が

あの女ひとのなかに潜む炎を目覚めさせ

誇りと恥じらいの古着を

あの女の心からかなぐり捨てて

どんよりした暗い日々^に別れを告げたようだった。

それでも、わたしはなにか忘れられ、許されもせず、一人きりだ

一人きりで、暖炉の傍らに惨めな思いで腰を下ろした…。

続く詩行から無造作に拾い読みをすれば、「もし二人が死ぬ前にもう一度幸せになれるとしたら／その時はどんな毎日だろうかとしきりに考えた／が、まだその至福の姿を想像できないままにいる」、「悲しみは永遠のように思われる／二人の心が痛み、休息は遠いかなたのように思われる」、「そしてふたりは愚者の樂園の焼け焦げた残滓に／冷たい怪訝な眼差しを注ぐ」、「わたしは暗闇でお前にむかって救いを叫ぶ／今お前だけが昔と少しも変わらぬと思われ／お前だけが甘美な日々の偽らざる名残りなのだから」、「二人が会って、笑い、話をして／わたしが決して忘れることができないことは、依然封印されたままなのだ」、「あの二人が姿を見せなくなったとき、わたしは独りで愚かしい勝利の記録をめくりながら／あの二人がいなくなったまま戻って来ない時のことを考える」

ここで「お前」はジョージアーナ、「二人」はモリスとジョージアーナの兩人、「あの二人」とはロセッティとジェインとして読むことができます。

あるいはまた、こんなにも切実さをにじませた詩句をこの場で引き合いに出すこともできる——「ああ、白々とした曉に、触れたりキスすることが叶わぬとは！」「もしお前が『恋人よ、冷たさの前に一度だけのキスを／孤独の夜と悲しい歳月が冷え冷えとする』と言ってくれたら……」、あるいは「わたしが触れた唇はもうなにも話してはくれまい……」「幾度もキスをしたお前のかわいい手は／もう安らぎと喜びの珠玉の言葉を綴ってくれることもあるまい」。

モリスの彼岸にむけた悲痛な叫びがある。それはジェインにむかって訴えた叫びではない、ジョージアナのことを考えていたはずだ、とリンジーは言う。そして「モリスはこの頃ジョージアナに極めて接近し、愛するようになった。しかし……肉体関係があつたかどうか不明である。どうもぎりぎりのところで、彼女は思い止どまったのではないか」⁽⁵⁾とも述べる。根拠となるのが、「近くてはるかに遠く離れて」と題された詩である。

あの女ひとはためらい、立ち止まり、引き返した。目は、

その濃い灰色の心の窓は濡れているようだった、

声にならぬわたしの惨めさに気づいて、

後悔なのだろうか優しい眼差しにかわった。

そしてわたしの胸の内に起こった哀願を、

強い恥辱の網に捕らえられながら口に出そうとしたとき、

あの人はわたしを制止して、「あなた！」と叫び、わたしたちの唇が重ねられた。

あの人の手はわたしを楽園に導いてくれた。

その口づけは甘美に思えた、やがて彼女は立ち去った、

彼女の言葉は甘美に思えた、それは

言葉のない音楽だったかもしれない―だが真実が降りかかる

そして口づけと言葉を知ったわたしはひとり残され、

まるで石の壁に向かい合っているようだった、

その間、背後には果てしない海のうねりが響いていた。

ちがう、どうしたというのだ、なぜお前はためらうのか

ツグミが悲しげに鳴いている、となぜいうのか

空が石のように硬く灰色だとなぜいうのか

東風が花や大枝を引き裂くとなぜいうのか

なぜこうまで人の子らは絶望的とみえるのか

お前の恋人はもういない、哀れな者、お前はひとり

きりなのだ。

モリスはジョージアーナとの関係にためらいがちである。彼女がマリー・ザンバコのために悲嘆のどん底に喘いで、「かりにモリスに体を委ねようとしたとしても、

彼女はきつと危ういところできつと身をかわし、相手の執拗な要求をはねのけたに違いないのである。……それに詩に描かれた濃い灰色の眼はジョージアーナのそれであり、ジェインのものではない」と論じた。ジョージアーナの眼は、グラハム・ロバートソンがいみじくも指摘したように、「深い英知をたたえ、水晶のように澄んだ眼」⁽⁶⁾は、対面する人に、思わず自分はその純粹さに値するのかと内省を迫るほどの迫力があつたという。それにジョージアーナはいったんこれと信じ込めば、その大義のために自分の存在のすべてを賭ける徹底ぶりを發揮する精神の持ち主だつた。婦人参政権運動において然り、ブル戦争反対において然り、後にモリスが社会主義者として実践活動に生活の主軸を移動させたときですら、モリスは、錯綜する不条理な人間関係に翻弄されながら、ふだんの真摯な筆使いで、しかし、特段の相談があるわけではないのに、幾度となくジョージアーナに手紙を書き送つた。「バーン・ジョーンズと一緒にいる限り、彼女にはこうした個性を發揮する機会にはほとんど恵まれなかつた。モリスの傍らにいてこそ、彼の情熱と献身を共有する彼女の姿をわれわれは見る事ができる。二人は二人の關係に潜むこゝろした可能性に互いに気づいたに違いない。しかし、ヴィクトリア朝にあつては夫婦はあくまで夫婦でなければならなかつたし、いまここで、モリスとジョージアーナの二人が夫婦であろうとすれば、徹底した社会的制裁が待ち受けているという認識がその頃の二人の手枷足枷となつていたにちがいない」⁽⁸⁾。マッケイルは、この時期の記述について、「差し障りのないように気を遣うことが多々あつて、ひどくつまらぬ書き方になつてしまつたにちがいない。……しばしば事実を背く嘘にちかくなつてしまい、ひどく不快でした」と懸念を表した。

ここで、「近くにしてはるかに遠く離れて」に異説があることを紹介しておこう。ヘンダーソンの解釈はこの一篇から「モリスが依然として妻に恋い焦がれているのに、相手からほとんど、あるいはなんの反応もえられなかつたということが了解されるだろう。：明らかにジェインに向けて書かれた」詩である、と解説する⁽⁹⁾。これを頭から

否定することはできないとしても、後発のリンジーの解釈にこそ説得力があると言える。リンジーの場合、ヘンダーソンの引用詩と同じ詩句を対象にしながら、ジェインに起因する苦悶を訴えた相手はジェインではなく、ジョージアーナだと判断する。『詩の本』の贈り物の意味についてもそうした文脈で捉える。モリス没後一〇〇年記念シンポジウムにおいて、R・マイルズは「『詩の本』のような贈り物を受け取って、だれが負担に思わないで済ますことができようか?」¹⁰⁾、「この贈り物を受け取った者は、それに見合う相応のお返しには一体どうすればいいのだろう、と困惑しただろう」といかにも思わせ振りの発言をした。この詩集はジョージアーナを、有無を言わず、共犯関係に引き入れてしまった、とだけは言えるだろう。詩集の装飾といい、感情といい、詩人の満たされぬ願いをジェインにはなく、ジョージアーナに向かつて表明しようとした一書と解されなくてはなるまい。まことに思い入れたっぷりの誕生日の贈り物だったのである。ともあれ、「詩の本」はこの時期のモリスの最奥部の感情の多くを明らかにするものであり、そこにはモリスとジョージアーナの両人が最も強く惹かれ合った時期の二人の関係に直接関与する詩も散見される。底流にあるのは過去と報われぬ愛への悲哀と苦悩である。モリスがジョージアーナに捧げる詩を書き上げ、もてる技すべてを注ぎ込み、本来ならば好奇の目から慎重に遠ざけておくはずの自らの感情を表白し、それを盛るにふさわしい美しい器を造形しえたことに、モリスが多量の満足を感じたであろうことは疑いの余地はない。モリスの私生活と芸術をこれ程までに融合させた結果が稀に見る手稿本の誕生であり、モリスが多くの悲嘆と愛を共にした女性の喜びのためにそれは捧げられたのだった¹¹⁾。

ここで、モリス発ジョージアーナ宛の手紙に注目する。二人の微妙な関係の実相に迫ることができるのではないかと期待を寄せて。ところが見事裏切られる。一八七〇年前後の一通が、とうとうかわずかに断片としての一葉が残¹²⁾

るだけである。「……彼のこと、こちらがいらいらしている時だから、気が変になりそうだ。それでも取り乱しはしなかった、あんな立派な人達に交じって、押し潰されそうな気分だったが。……つまり僕なんか狭量な面白味もない退屈野郎ってわけだ——だったら、もうこれ以上君を退屈させるのも止めましょう。さようなら、君が許すがざり僕は君の味方だ。追伸——裏に『二〇月』を書いておく、もしネッドが一緒なら見せてくれたまえ」なぜか明らかに冒頭部分が欠けた、妙に自虐的な文面である。「彼」とはだれなのか、バーン||ジョーンズであろうか。詩「二〇月」は『地上楽園』第三部の詩。

その後は六年以上の空白をおいて——この期間こそ両人が「最も親密で熱い関係」にあった時期である——次の手紙は『書簡集』をたどる限り）一挙に一八七六年三月二六日に飛ぶ。その手紙は、当時モリスが没頭していた染色に関する話題を主にした、スタフォードシャのリークの町でしたためられた近況報告に終始する。「小生の毎日、仕事で大混雑です。動きたがらないランカシャの連中にあれこれ仕事の指示をするだけでなく、自分から染色小屋で木靴を履きぶかぶかの作業衣を着て仕事をしなければなりません——お判りでしょう、それが僕の性分なんです。せっかくなので僕の詩に期待を寄せてくださったのに、ご厚意に添えず申し訳ありません。……目下のインディゴ染色にまつわる苦勞や可能性をお話するとなれば、一週間はかかるでしょう。でも、順調に事が運んでいることはせめてご賢察いただけるでしょう。羊飼いの少年が一人で見張りを立派にこなすようになるのと事情は同じです」¹³これはこれで完結していると思えても、六年の空白を思えば、いかにも唐突な感じは否めない。その間のいきさつが全く欠落している事実は、当事者間の理解は成り立っても、われわれには不自然さがつきまとう。なにか反社会的な事情が絡んだ故の作爲的空白ではないかと気に掛かる。しかも、ジョージアーナ発モリス宛の手紙についても、二人の関係の手掛りにつながる手紙はまったく残されていない。

ところが一八八〇年代前半になると、一転してジョージアーナ宛の手紙が急増する。これはモリスが東方問題を契機に現実参加を強めた時期に重なり、七〇年前後とモリスの生活環境、対社会の関係はまるで異なる。モリス書簡集の編者として定評のあるN・ケルヴィンは、「ジョージアーナ・バーンIIジョーンズとアグレイア・コロニー宛のモリスの手紙をどう解釈したらよいか、これは基本的疑問——はたしてモリスとこの二人の女性のいずれかもあるいは両方との間に性的親密さがあったのかどうかという疑問——に対する解答が不在なため、面倒な問題である。事の真相はどうあれ、二人に宛てた手紙に基づけば、ジョージアーナとの関係のほうがモリスにとってより重要であったことは疑いの余地はない。ジョージアーナこそモリスがあらゆる局面でもっとも率直かつ完全に語りかけた相手であり、関心事や心配事を、とりわけ政治的関心を共有することができた相手であった。彼女こそモリス

図5 ジョージアーナ・バーン=ジョーンズ 1880年頃。

こうした事情について、リンジーは「手紙は紛失したか、破棄されて現存しない。一方モリスの彼女宛の手紙は現存するものがあるても、どれも用心深く取捨選択され、おそらく編集されているのではないか。ジョージアーナとマッケイル「彼女の娘婿」引用者注」の二人が、モリスとジョージアーナの関係を、ことにこの二人が最も親密に熱く心を通わせ合った一八七〇年前後の数年間について、巧妙に刈り込み世間体に気を配ったことは間違いない」と分析する。

が他のすべての人に先んじて友人として遇した女性であった」と述べる¹⁵。特に文中「政治的関心を共有することができた」とは示唆にとむ指摘である。後に東方問題とは比べものにならない、困難と苦渋を強いられた社会主義実践者モリスにわれわれは接することになるのだが、そのときこのケルヴィンの発言の意味があらためて思い出される。ジェインのたんなる代替ではなく、あるいは夫の不倫に悩む人妻への同情でもなく、モリスは、この女性に、明らかにジェインに求めて叶わなかった、性愛とはまた次元を別にした人間的共感を信じていることができた、文字どおりもう一人の「人生の相棒」だったのである。

ジョージアーナにしてみれば、この共感は夫ネットとの間には望むことができなかつた連帯だった。このことをリンジーはこんな風に表現した。「ロセッティの相棒としてジェインはまことに申し分ない存在だったとすれば、ただしロセッティには自己猜疑と自己破滅への衝動があつたから、ジェインだけでなくどんな女性とも幸福な結婚は望むべくもなかつただろうが、それにひきかえ、モリスの相棒としてジョージアーナは文句のつけようがない完璧な相棒だった」¹⁶。盟友エドワード・バーン||ジョーンズが生涯ただ一度ウイリアム・モリスと考えを異にしたのは社会主義だつたというから、バーン||ジョーンズ夫妻がこの問題への対処をめぐって、なんらかの溝を意識したとしても、それはありうることだった。一八八五年、モリスが社会主義同盟を結成して、機関紙『コモンウィール』の編集長になると、ジョージアーナは同紙の送付先宛名を「ミスター・バーン||ジョーンズ」ではなく「ミセス・バーン||ジョーンズ」に変更を願つたという事実がある。

ただし、バーン||ジョーンズにとつて問題はつねに、姿勢の根本が政治的であるのか人道的であるのかであつて、彼は「政治には無知」¹⁷を自称したりもした。だから社会主義をめぐって、モリスと考えを異にすること避けられなかつた。彼はモリスが政治のために芸術を放棄してしまうのではないか、もしそうなれば、モリスには失望し

かない、と強い危惧の念をもっていた。結局、二人は政治の議論を控えることよって、友情を維持しようと次善の策を取った。こうした微妙な状況をジョージアーナは『回想の記』において次のように述べた。モリスが「自分自身の特殊な才能の行使からはずれて、別な道で世のためになるうとするのは、悪いことではないにしても、それは常に過ちである、というのがエドワードの持論だった」⁽¹⁸⁾。ずっと後にこの時のことをバーン・ジョーンズは「モリスを失望させたのはこの時だけだった。……これはモリスの余技だった。モリスはなにをいってもまず詩人であり芸術家だった」と回想したという。しかし、モリスが労働者と連帯して、激しく実践活動に関与したにもかかわらず、二人の友情はびくともしなかったことは、その後の二人が証明してみせた通りである。

モリスが現実参加へ強く傾斜したのは、一八七〇年代後半いわゆる「東方問題」(Eastern Question)が契機だった。「東方問題」とは、バルカン諸国に長くくすぶる複雑な宗教・人種問題を総括した呼称で、具体的には一八七五年トルコ支配に対する蜂起がボスニア、モンテネグロ、セルビアでまず起こり、ブルガリアまで拡大、これをロシアが支援した。トルコ政府は激しい弾圧をもって臨んだ。その残虐行為(一万五千人が虐殺され、八〇の町村が壊滅し、一〇の修道院が略奪にあった)が一八七六年六月二三日の自由党系の『デイリー・ニューズ』紙に報じられると、親トルコの立場をとるディズレーリ政権に対して抗議の機運が起こった。

九月にはグラッドストーン(一八〇九―九八)が『ブルガリアの惨事と東方問題』と題した小冊子を発表。これに呼応するように、モリスは一〇月二四日、『デイリー・ニューズ』紙上に「ウィリアム・モリス、『地上楽園』の著者」の署名入りで「イギリスとトルコ」と題する長文の投書を行った。これがモリスの公の場における最初といわれる政治的発言である。時の宰相トリー党(保守党)ベンジャミン・ディズレーリ(一八〇四―八一)がトル

コを支援してロシアに開戦することに至る報道に立ち向かったモリスの抗議であった。デイズレーリが、ロシアの南下政策を阻止しなければ、ロシアにダーダネルス海峡の制圧を許すことになりかねず、イギリスはインドへの通路を断たれてしまう、そこでトルコをロシア帝国主義に対する防波堤として、イギリスのオスマン帝国への支配を強化するという大義の下、戦争を画策していることに、モリスが猛然と異議を唱えたのだ¹⁹。

イギリスが戦争に向かっていくという噂が巷に流布しているのを黙視できません。心底からの驚きをもって、ここに問いを発します―誰のために？ 誰に対して？ そして、いかなる目的のために？ ……簡単に言えば、誕生したばかりの、不可能の恐れを知らぬ、勇猛果敢な、伯爵（デイズレーリは一八七六年八月二日初代ビーコンフィールド伯に叙せられた）が …… にはともあれ、われわれを恥さらしの正義なき戦争へ巻き込む決断をくだしたということ。いかに恥さらしか言葉では言い表せません。 …… 自由党に訴えます、そして尋ねます、この恥さらしを回避するための努力ははたしてやりがいのないことなのでしょうか、と。働く人々に訴えます、そして、その人々に求めたいのは、その人々に晴れて天下が訪れ、いま努力して追及しているすべてのが、いやそれ以上のことが成就できた時、必ずやこの恥が忘れられず、重荷となることをせひ今こそ肝に銘じて欲しいのです。これら二つの集団に属する人々にむかって、特に訴えたいのは、遅きに失することなく、今取り掛かるべき急務として、他のスローガンは取り下げても、せめて、トルコのための戦争反対、盗つ人や人殺しのための戦争反対！ の声だけは人々の耳に届くよう努めることです。 ……

東方問題協会 (Eastern Question Association, 略称 E Q A) が設立されたのは、この投書の二カ月後の一二月

八日だった。ロンドンのセント・ジエイムズ・ホールで結成大会が開催された。設立の中心人物はシェフィールド選出自由党議員A・J・マンデラ（一八二五—一九七）だったが、その人物と同じくらいに会場で注目を集めたのは、その熱烈な支持と『地上楽園』の著者として著名なウィリアム・モリスだった。マンデラにとっては、モリスは同志を募る協会の有力な広告塔だった。じじつ、モリスはウィリアム・アリンガム、ウィリアム・ド・モーガン、C・J・フォークナー、フィリップ・ウェップら七人の知人を同協会に推薦した。

ここで関心を惹くのは、この集會にジョージアーナが出席した事実である。『回想の記』によれば、「会場はぎゅう詰めでした。女性の席は一番上でしたから、黒々とした男性の塊が建物を一杯に埋め尽くしている様がよく見えて、なかなかの感動的な光景でした。発起人はチャールズ・ダーウィン、ロバート・ブラウニング・ジョン・ラスキン、アンソニー・トロロープなどそうそうたる顔触れでオーケストラ・ボックスに陣取り、モリスはその最前列にいました。でもエドワードの姿はありません。……集會は九時間続き、グラドストーンの歓迎会とスピーチは忘れられません²⁰」と彼女の関心を率直に記録した。一言付け加えておけば、エドワードはモリスと同じように協会員となったが、たんなるシンパにとどまっただけにすぎない。だから、ロシアの対トルコ戦勃発の直後、翌年の五月に開催された大会にも「今夜こそ騒ぎの手助けをしてこよう」と意気込んだものの、結局は「会場に入れずじまい、ぎゅう詰めだった―やむなく引き返した」。これをジョージアーナは「いそいそとそうしたのではないでしょうか」と書いて、「あの人は、趣旨がなんであれ、大衆を巻き込んだ集會は嫌いなんです」と付け加えた。それにひきかえ、ジョージアーナの関心は、たとえば、「私共は、今は、新聞なしではいられず、代わって『タイムズ』と『デイリー・ニューズ』の両紙を取って、戦争から目を離さないでいます。利害関係を思うと恐ろしい戦いですし、これまでになくヨーロッパのあの地域を目覚めさせたのです²¹」などと健在である。

EQ Aの抗議集会がくりかえされる最中、とうとうロシア軍はシブカ峠を占拠し（一八七八年一月九日）、コンスタンチノープルをパニックに陥れ、サルタンが休戦を要請する事態にまでなった。緊迫する情勢を背景に、一月一六日、ストランド街のエクセター・ホールで反戦決起集会、「労働者中立示威運動」(Workers's Neutrality Demonstration) が開かれる。ジョージアーナは夫とフォークナー夫妻とコーメル・プライスとともに参加した。会場に入り切れない群衆はトラファルガー広場まであふれた。「会場の熱狂ぶりはすさまじく、参加者の心はただひとつになっているようでした。前々から問題だったのは、集会が反対陣営のために粉砕されないよう、しかも、会場に足を運んだ参加者の総意に水をささないよう配慮することでした。そこで一つの提案がなされました、参加者の入場時に大オルガンを演奏をして、それに気を取られるように仕向けたらどうか、だれでもが知っている美しいメロデイとその場にふさわしい歌詞を用意しておけば、全員による大合唱となり、いっそう効果的ではないのか、という案が出されました。そこで委員会はモリスに歌詞を依頼したのでした。モリスが直感的に選んだのは『屈強の北方人』のメロデイであり、心の奥底から発せられた『目覚めよ、ロンドンの若者たち』でした。わたしたちがオーケストラ・ボックスに着席すると、目の前に新しい歌詞を書いた白い紙片が会場全体に点々と広がり、稽古もなしに、混乱もなく大勢が起立して斉唱したのでした」²²モリスは「金銭づくで戦争をする」党を非難し、宰相ディズレーリを援護するヴィクトリア女王を批判して「女帝ブラウン」（女王と馬丁ブラウンとの仲は公然の秘密だった）と揶揄した演説によって、一部聴衆の不快を買う一幕もあった。

翌年四月、ロシアが対トルコ戦布告に踏み切ると、間髪をいれず五月一日、モリスはEQ Aから「正義なき戦争―イギリスの労働者諸君に与える」と題する有名なマニフェストを発表した。これは六年後、民主連盟に加入する時にとるモリスの立場を予告した所信表明となった。モリスが戦争遂行人として槍玉に上げるのは、「証券取引

所の強欲な相場師たち、怠惰な陸海軍の将校連中、クラブの高慢ちきな老いぼれども、戦争で失うものは何も無い連中の満ち足りた朝食のテーブルをわくわくさせる戦争ニュースを届けるのに必死な新聞」などであり、「もしわれわれがこうした先導者のもと、われわれの敵ではない民族を敵にし、ヨーロッパを敵にし、自由を敵にし、自然を敵にし、世界の希望を敵にして正義なき戦いに突き進むならば、それこそ二重三重の恥辱である。……同胞の市民諸君よ、もし諸君が不正を糺そうとするならば、もし諸君の階級全体を平和のうちに団結して向上させるといふ最も価値ある希望を抱いているならば、もし余暇と知識を渴望するならば、もし世界が始まって以来われわれの躓きの石であったあの不平等を減じることが切望するならば、それなら怠惰を投げ捨てよ、正義なき戦い反対の叫びをあげよ」。そして「正義を愛する者」という署名で終わる。

しかし、東方問題協会の運動も、ロシアがトルコと戦火を交えるに及んで、イギリス世論は急速に好戦論に傾き、たとえ抗議集会を予定しても、頼みにするグラッドストーンに講演は断られるなど、ホイッグ党の支持も望み薄となり、協会活動は事実上行き詰まった。モリスの正義は暗礁に乗り上げる。モリスは妻やジョージ・ハワードに敗北感と無念を伝える手紙をしきりに書く。「反戦派が多数派という考えは今や影が薄くなっています」⁽²⁴⁾、「もし戦争をするというのなら、その時はやつらに腹一杯戦争を食わしてやろうじゃありませんか」、「わたしの政治活動は当面これで終わったと思う。しかも右往左往したあげくのこと、自分でも愛想が尽きる。……昨日は大荒れのEQ Aの会合だったが、なにも発言をしなかった。もう気持ちに離れている」⁽²⁵⁾

しかし、これくらいのことではなかつた。一八八一年の元旦、モリスはジョージアーナにこんな手紙を書く。⁽²⁶⁾

近頃なにかしら憂鬱です（言葉が強すぎるかも知れませんが、ほかにどう言ったらいいか分からないのです）、人生が楽しくないなどということではないのですが、これまで（どうにか耐えられる程度の）辛酸をなめて来た中年男性に相応な気分なのです。こんな風に落ち込んでいる時には、個人的事情にかまけていないで、もっとまじな問題を考えようという気持ちにえてしてなるものです。それで今、小生の心はゆっくりでも訪れて欲しいと考えている大変革への思いで一杯なのです。しかもこの新年がその一里塚になること間違いないのです。……こうした思いを新年に当たり希望の言葉としてしたためながら、貴女と分かち合おうとしても、まさか貴女からとぼけたことだとか、迷信かつぎだと思われることはありません。それは富者の失墜と貧者の向上にむけた仕事にとってすばらしい転機となるはずです。それこそがなにもまして今求められているのです。

年頭の所感ではあるうが、ただのそれではない。社会の「大変革」へ向かう「一里塚」に寄せる「希望」を共有しようとする、苦渋にみちた思いを吐露した「年頭所感」である。半年ほど後、ジョージアーナに送った手紙も同様である。⁽²⁸⁾

『アンチ・スクレイプ』のことですが、あまり居心地のよい場所ではありません。……始めるのが遅すぎたのです、それに敵はあまりに多勢です、つまり教育のあるないにかかわらず、ほとんど全部の人達が敵です。建築物について言えば、破壊はすでに終わったと言っても、実態から掛け離れてはいないでしょう。現実には世人のこんなつばやきが聞こえてくるのです——現にそんなことが進行しているのは嫌だけれど、きつと我慢できることだと思う。……このことを人々の心に訴えかけるのは、間違いなくしんどいこと、だからそんなことはし

ないでいる、と。……もし貴女から、どうしてこんな風に無駄な抵抗をするのかと尋ねられたら、小生としては、第一にそうしないではいられないからです、第二に、ここからなにかが生まれる、現在のわれわれには未知の、なにかそんな類いの文化が生まれる、と信念みたいなものに勇気づけられるからです。

「アンチ・スクレイプ」(「削り取り反対運動」とでも訳すか)とは、いうまでもなく、東方問題協会に参加の翌年、モリスが設立した「古建築物保護協会」の別称であるが、この手紙には民衆の無気力に苛立ちを覚えながらも、希望を感じ取っている前向きなモリスがある。同様に、こんな文面もジョージアーナに綴る(七月二八日)――「まるで社会の不平等にもう我慢がならん、というような新しい空気が立ち上がってくる気配を感じます。別段不思議ではありません、この不平等をだれよりも痛感しているいちばん熱い連中が、一気呵成に本来あるべき姿を取り戻す方策を生み出そうとしているのです」²⁹、「世の中全体に重くのしかかる愚行や悪徳を非難する不満不平について、必ずしも貴女と同じ考えではありません。……ただ不平不満を言うだけ、行動もしないのは、人生を投げ捨てるも同然です。心に宿る大義に則った言葉であれば、ただ人を傷つけるだけとは考えません。……最悪の場合でも、戦場に赴く兵士を鼓舞する音楽の役目くらいは果たせるでしょう」³⁰

断片的だがここに引いた文面は、実に正直に民衆のための啓蒙運動へ心を強く寄せていくモリスの希望を語っている。だが、この手紙のもう一つの側面に無関心でいるわけにはいかない。受取人が一貫してジョージアーナであるという事実には、マッケイルの伝記は、これらモリスのジョージアーナ宛の手紙を第一次資料としながらも、おそらく意図的に、受取人の名を伏せたまま記述された。夫婦間のスキヤンダルと一家に潜在する遺伝的疾患の二つは禁忌事項とされたヴィクトリア朝という時代を考えれば、マッケイルの立場はまことに微妙である。危うい資料の

扱いに神経質となっても当然だった。義父の親友、著名な美術工芸家から送られた義母宛の書簡の公開などともないことだった。(ジョージアーナの死去は一九一四年である)。しかし、そうだとしても、手紙の受取人の名を伏せられては、重要な情報が読み手から奪われてしまうのをどうすることもできない。やり場のない不満がつきまとう。

マッケイルは『伝記』第二章「ロンドンとケルムスコット」を執筆するにあたって、主たる資料としたのは一八七九年一〇月から一八八一年九月までのジョージアーナ宛の一四通あまりの手紙と推察できる。民衆運動に身を投じようとするモリスの内的変貌の過程をさぐるうとするマッケイルが、ジョージアーナへの手紙を唯一の拠り所にしたと考えられるのはまことに意味深長である。

マッケイルは「実践的社会主義へむかうモリスの歩みは、彼の毎日の思索や信念を徹底した透明さでもって書き綴った個人的書簡のうちに記録された。多くの心的揺らぎを経る中に、段階的に前進するモリスを跡付けることができよう」と資料を評しながらも、あくまで「個人的書簡」と言うにとどめた。マッケイルの引用はしばしばモリスの長文の手紙の全行を採録した。さすがに伝記執筆の資料としての重要性を見落としてはいない。だからこそかもしれないが、その受取人の名を明示するわけにはいかなかったのだ。しかし、今、受取人の名の開示・非開示はきわめて大きな意味をもつ。ケルヴィンはそうした認識に立って「一八八〇年代はじめの現存する手紙のなかで、社会の不正義に対するモリスの感情と変革への希望について、もつとも率直に胸の内を明かしてくれているのは、ジョージアーナ・バーン⁽³¹⁾ジョーンズ宛の手紙である」⁽³²⁾、「この時期、モリスの心中にどんな変化の兆しがあったにせよ、それが往々にして明らかになるのは、現存する書簡としてはジョージアーナ・バーン⁽³³⁾ジョーンズ宛手紙である」と明言した。

それでもマッケイルは第一二章中ただ一か所、「彼はロンドンからバーン⁽³⁴⁾ジョーンズ夫人に手紙をしたためた」と受取人を例外的に明示した。その手紙は数日前の手紙の続編として読まれるべきもので、ともにモリスが長年の懸案だったテムズ川上流、ケルムスコット村への船旅を家族、友人とともに試みた実録的報告である。したがって、モリスの社会主義実践とはなんの関係もない。だからこそ、受取人を明示することができたとと言える。一か所でも明示できれば、まことしやかな筆の運びにも申し訳がつくと、マッケイルは考えたかもしれない。伝記作者として内心忞怍たるものがあつただろう。作者本人が一番よく分かつていたはずのことだからである。

しかし、モリスの場合、よくよく考えてみると、心和む田園風景や記憶に残った教会などに心を寄せて、散文詩に適う文章を書き綴るとき、それは往々にして自分だけの秘密を、自然への美妙な共感という秘密をただ一人の人にむかって打ち明けることと同義である場合がじつはあるのだ。背後に不安や苦しみが疼いていることだ。いや、むしろそんな場合が多いのではないか。モリスが心に描くユートピアへ待望の訪問を果たそうとする、その道中を克明に綴った、それはやがてモリスの代表作『ユートピア便り』に、直接的には二二章から二八章に結実するはずの船旅だった。田園の真つ只中を移動する理想郷への旅を刻々、ほとんど今というリアルタイムで報告する相手はだれであつてもいいはずはない。それは無意識に精選された、自分にとって「申し分のない相棒」、コンフィダントでなければならなかつたはずである。そう考えれば、「現実参加」をめぐる手紙にしても「船遊び」の実録にしても、主題に大差あるにせよ、モリスは一つの思いを、ほとんどモリスの秘密を、ひとりジョージアーナに発信し続けていたのだと考えることができる。

その頃、ジェインはどうしていたのだろうか？

図6 ジェインと娘たち ケルムスコット領主館の玄関先で。左からメイ、ジェイン、ジェニー、ジェニーの看護付添人。1900年頃。

モリスが妻ジェインに宛てた一八七八年一月一九日付けの一通がある。前述した「目覚めよ、ロンドンの若者たち」の大合唱で盛り上がった反戦決起集会の様子を妻に伝える手紙である。この種の集会としては、おそらくモリスが最も手ごたえを感じた出来栄であったのではないか。得意顔のモリスが書いた長文の手紙である。⁽³⁵⁾

……ぼくは最後に演説をしなければならなかったが、その頃になると、和平派は和平の実現に闘志満々、一方、戦争派は怒りのあまり顔面蒼白と、いったありさまだった。集会はすばらしかった、整然として熱狂的だった。ただし、敵方の狼藉者を場外に締め出しておくのに一苦労した。外の連中の騒がしさときたら、まるで灯台を襲う荒れ狂う海のようなだった。……会場の歌のことはもう新聞で承知だろうと思う。名案だったと思わないかい？……われわれが壇に上がろうとしたらちょうど

その時、歌が始まり、わたしがひどく興奮したことは君にも想像がつくだろう。……『ロンドンの若者よ』を三部同封して届けます。手元にまだ一束あるので、ハワード夫妻用にもつと必要なら、また送ります。

ジェインはどう反応しただろう。返信が残らない以上判断のしようがない。高揚するモリスが共感を求めた文面に、あるいはハワード夫妻用に追加を促した文面にどんな返事をしたのか、しなかったのか。ヘンダーソンは「はたしてジェインが少しでも関心を寄せたかどうか疑わしい」と言うのだが、ジェインはじつは、一八七七年の冬を娘たちとともに、ハワード夫妻の世話で、「とても美しい、いたるところにオーリーヴやレモンやオレンジが実って、海は青く、夕焼けもすばらしい」⁽³⁷⁾ 避寒地として有名なイタリアン・リヴィエラで過ごしていた（モリスも後に合流するが）。正確にはサン・レモに近いオネグリアで、ロザリンドがハワード家の別荘に近い一軒家を見つけてくれたのだった。モリスは妻や娘たちに頻繁に手紙を書き送る。しかし、東方問題をめぐる政治的混乱や自分が巻き込まれる政治的苦境などをモリスが話題にすることはほとんどなかった。したとしても、集会について一方的なかわば事務的報告に終始した感がある。

その好例が一八八四年三月一日の手紙⁽³⁸⁾だろう。モリスはロンドンで開かれたマルクスの一週忌（命日は一八八三年三月一四日）と短命に終わったバリ・コミュニケーション（一八七一年三月一日―五月二八日）の二つを記念する集会に参加した。社会主義者と労働者にまじって、トテナム・コート・ロードからハイゲイト墓地まで胸に赤いリボンをつけて行進に参加したのだった。警官の厳しい規制にあつて墓地に入ることができないまま、悠々と都心に引き上げて来たことなどを淡々と記録したレポートである。もしかしたらジェインの無関心がそうさせたのかもしれない。それにしても、ジェインはなぜそんなに無関心に振る舞うのだろうか？

前年の夏、娘のジェニーが癩癩の発作に見舞われた。その兆候はすでに一〇代なかばから顕在化した。だからモリスには不吉な予感がないではなかったろう。しかし、あらためて、その紛れもない癩癩の事実を突きつけられると、モリスは耐え難い衝撃を受けた。おそらくモリスにとって、妻の不誠実にはなんとか耐え忍ぶことができたとしても、この娘の不幸の衝撃はその比ではなかったらしい。すでに、一八八二年の夏、こんな手紙をジョージアーナに書き送っている。「体調思わしくありません。それに、やはりお話すつもりはありませんが、別に心配事があって、積もり積もって気分的にすっかりやられてしまいました」⁽³⁹⁾この文言について、マッケイルは「夏と秋を通じて、娘の深刻な症状が繰り返えされ、モリスには散々な一年になってしまった。娘の重篤がモリスの神経を完全にずたずたにしてしまった、と言っても言い過ぎではない」⁽⁴⁰⁾。

モリスはここで社会が忌避する二重苦を背負うことになった。マッケイルが「この苦悩からモリスは以後解放されることはなかった」⁽⁴¹⁾と書いたのはそんな意味がこめられていただろう。妻ジェインにしても同じだったはずである。マーシュの言うとおり、これは「家族にとって苛酷な仕打ちであり、終身刑の宣告」⁽⁴²⁾にも等しかった。なぜなら当時はまだ治療法も知られていない、世間に恥ずべき心の病いと受け止める風潮が強かったからである。「わたしの知るモリス」の著作がある G・B・ショーは、娘の不幸に遭遇した父親は、自分の癩癩持ちが誇張された格好で遺伝したのだと思ひ悩んだらしい、とモリスに同情的である。モリスにも人前で極度の発作的興奮をみせたり、忘我の放心状態に陥る「症状」があつたことは、彼を知る多くの人が指摘するところで、それについてはモリス本人が誰よりも一番よく知っていたはずである。妻のジェインについても、パート・エムスに療養滞在したことからも推測できるように、やはり人に知られたくなかった「症状」があつたことは明らかである。

モリス一家の劣性遺伝について、執筆上マッケイルが取った姿勢は、言うまでもない、スキャンダルを暗示する

モリスの手紙に対処したあの用心深さのくりかえし返しであった。だから長女ジェニーの一〇代なかばから顕在化した、そして生涯彼女につきまとった癩癩性発作についても、マッケイルは最後まで表立って話題にすることはなかった。

ジェニーの症状は長い間一進一退を繰り返した。いかに娘を不憫に思い心を痛める父として、離れて暮らすことが多かった娘にしきりに手紙を書く。商用であるいは社会民主連盟の地方支部（例えばグラスゴー支部）視察の旅に出ても、旅先からせせと娘に手紙を書くことも珍しくなかった。ただし、直接ジェニーにむかって体調を問いつけたり、見舞いの言葉をかけることほとんどなかった。モリスが綴ったのは、マートン・アベイでの仕事の進み具合、友人・知人の来訪、講演の予定など相も変わらぬ多忙な身辺雑記の類だった。その代わりモリスは母や妻にあるいは娘のメイに手紙を書くときには、しばしばジェニーの体調を気遣って、容体を尋ねている。

一八八三年元旦、モリスがライム・リージスに家族と滞在中のジェニーに送った手紙、「みんなの手紙がまだ届いていません。……でも今日のうちには一二通はなんとか届くでしょう……新年お目でとうをわが愛する娘に送ります。ママとメイにもわたしの新年のお祝いを伝えてください。……土曜日に都心へ出て、なにかお土産にでも考えたのですが、ひどい雨降りで、残念だが、それどころではなくなってしまうました⁽⁴³⁾」といいながら、午後からコロロニオ夫人を訪ねて、娘たちにレースを買ってやりたいけれど、どこへ行けばよいかと尋ねて、ホニトン製の上等なレースを手に入れることができたが、「父には綺麗と思えても、おまえたち二人にも本当に気に入ってもらえたか、ぜひ正直に言ってください。気に入らなければ、また別なものを買うことにします」

二月二日のメイ・モリスのマグナッスン夫人宛て手紙が興味深い。手紙はギターを買う紹介の労をとってくれたことへの礼状ながら、ジェニーの近況とモリスの訪問について語っている。「ジェニーはロンドンを出た頃より多

少ましです。でもとてもとても元気がありません。天気の変化がひどく、すぐに体調は逆戻りです。……海辺の小さなとてもすばらしい町に滞在していますが、こんなに美しい魅力ある場所は想像できないでしょう。で、わたしたちのいる所からは丘陵地と湾のすばらしい眺めが楽しめます。周辺にはたくさんの散策路があつて、天気が許すときには、短い散歩に出ますが、ジェニーも楽しそうです。……父がわざわざわたしたちに会いに来てくれました――わずか二、三日のつかの間の滞在でしたが、また近いうちに、こんどはもう少しゆっくりしたいと言っていました。目下、父はロンドンで面倒な仕事の最中なのです」

八月二一日付ジョージアーナ宛て手紙には「先日は詩作について心遣いをいただき、感激しております。ところで、ご存知でしょうが、小生それどころではなく、心配事のため、白状しないではいられません、哀れにもすつかり弱気の虫にとりつかれてしまつています⁽⁴⁵⁾と珍しいほどの弱音を吐いている。「心遣い」とはモリスに以前のように詩作に戻ってください、という彼女の懇願だった。「心配事」とは、ケルヴィンの注記をまつまでもなく、「ジェニーの健康状態」で、もつと直截に言えば、癲癇の発作である。

八月三〇日には、ジェニーの付き添い看護師ミス・ベイリーへ手紙を送つて、「妻から聞いたのですが、あなたがロンドンを発つてから、娘のジェニーが発作を起こしているとのこと。なにかそんなことがあつたら、知らせてくれるよう頼んでおくべきでした。最後の発作の様子を手数を掛けますが、知らせてくれませんか？ 二重手間で申し訳ありませんが、心配なのでウエップ先生とも連絡をとりたいのです」

こうした心痛が、もしかしてぶつつけようのない怒りをもたなつて屈折した時、モリスを七〇年代後半の政治的な運動へと駆り立てた、というのはジャン・マーシュである。⁽⁴⁷⁾

翌年一月、ジェニー二三歳の誕生日に「誕生日のお祝いを言うためにペンをとりました。型通りですが、ご多幸

を祈ります。そして数え切れない程の祝福がありますように。……記念にオックスフォード・ストリートのうちの店の向かいの宝飾品店で小さな昔のブローチを買いました。書留便で送ってくれるとのこと、無事手元に届いて、わたしと同じように綺麗なブローチと思ってもらえれば幸いです」⁽⁴⁸⁾

一八八八年夏、モリスのジェニーへの手紙が急増する。ケルヴィンのいう「一八八八年の後半ジェニー宛ての一連の手紙」⁽⁴⁹⁾のはじまりである。ジェニーが個人経営のモールヴァンの診療所に入る羽目になったのだ。そこは、イングランド西部のモールヴァン丘陵の東斜面に位置する鉱泉保養地として知られる。モリスの手紙「場所が気に入ったようでとてもうれしい。きつと、それだけ健康のためにもいいこと間違いなしだ。こちら日曜日は少々風があったが、いい天気だった」の書き出しで、あとは忙しい講演活動、自邸のもと馬車小屋を会場とした、社会主義連盟ハマスミス支部の定例集会、バンク・ホリデイを利用した会員親睦のピクニックのことなどを伝えた。そして「それでは、愛するジェニー、はじめにしょぼくれた便りになるだろうと、予告したとおりになりました。約束を破らないですんだことになる。さて、最後に天気のことを一言、今日は暑くていい天気だった。庭の眺めが本当にすばらしい、愛しい娘よ、くれぐれも楽しい時を過ごしてください」⁽⁵⁰⁾

この頃、ジェインはプラントにこんな手紙を書いていた。一八八八年八月九日の手紙だが、興味深い文面が残る。「ジェニーがモールヴァンに行ってしまつて留守です。……医師は完治の望みは十分あるというので、そこに希望をつなぐより仕方ありません。家族みんながひどく悲嘆にくれています。ことにずっと一緒にいたわたしには、どうしてもそれに馴れることができません。……まるで短剣を突きつけられた思いでした。でも、いまは極上の休息に恵まれて、一〇〇パーセント楽しんでます」⁽⁵¹⁾

この手紙にこだわるのは、背後に次の課題、ジェインとプラントの愛人関係があるからである。

◆モリス夫妻とウィルフリッド・スコーエン・ブランド

図7 マリー・ザンバコ エドワード・バーン＝ジョーンズ
による鉛筆素描。1871。

一八七〇年前後、前述したように、ジョージアーナは夫の「不誠実」に苦しんでいた。夫の相手はマリー・ザンバコ。彼女は、ハジィーとユーフロジニー・アイオニーズ・カサヴェツェイの娘で一八四三年生まれのギリシヤ人彫刻家である。一五歳で父と死別、母に連れられてロンドンへ渡る。一八六〇年、彫刻家を志して単身パリへ留学、翌一八六一年、医師としてギリシヤ人社会に羽振りをきかせる、親子ほど年が違うデメトリウス・ザンバコと結婚、六四年に息子が、六五年に娘が生まれた。一八六六年、早くも訪れた破鏡の嘆に、マリーは夫を残して、子供と一緒に母が住むロンドンに戻った。

「不誠実」の発端は、カサヴェツェイ夫人が娘マリーを連れてバーン・ジョーンズのアトリエを訪ねたことだった。夫人は、美貌でしられた娘、ザンバコ夫人の肖像画を依頼してきたのだった。やがてバーン＝ジョーン

ズと彼女は足繁く両家の間を往来するようになった。そして二人が画家とモデルの親密な関係に陥ったのは一八六七年の頃である。バーン・ジョーンズはモデルのデッサンをくりかえすうちに、顔に漂う言いようのない深い翳りに引きつけられた。画家はすぐにそれが女の抗しがたい魅力であることに気づいた。マリイも画家の気配りを全身で感じながら過ごすアトリエの時間が、不幸な現状からの救出であるように思えた。恋するマリイを目の前にして、バーン・ジョーンズは気がついてみれば、彼女の愛に激しく応えていた。家庭内で信仰心篤い物静かな妻ジョージアーナはけっしてバーン・ジョーンズの激情の対象ではなかった。

バーン・ジョーンズの手紙が現存する。受取人はその頃絵のレッスンを受けるバーン・ジョーンズ邸グレレンジをしばしば訪れていたジョージ・ハワードである。「小生、約束があるのはたった週二日、火曜日と土曜日で、ザンバコ夫人が見えるのです。でも、お出でくださってはならぬ、という理由はありません。ただし部屋は人であふれかえっています、それに小生大勢に囲まれて、ろくそつぱ仕事もできないありさまですが、それでもよろしければ、どうぞ」¹⁾じつに慇懃無礼な書き方である。来訪はご遠慮ください、と言っているのも同然ではないか。相手の好意に甘えて言いたい放題の感じがある。「何が何だか分からぬうちに、相手が自分に夢中になり、自分も気がつけばそんな相手に激しく応えていた。……マリイが約束してくれる、甘美にして蠱惑的な陶醉をむさぼり、……マリイと肉体をともしする快樂の虜になった」²⁾

「事件」が発覚したのは、なんのことはない、昔からどこにでもありそうな日常の一齣、妻が夫の洋服を片付けていて、たまたまポケットにあったマリイの手紙を見つけてしまったのだ。夫とマリイが恋人同士であること、しかも、大分前からそうであることが露見した。一八六八年九月、ジョージアーナは子供を連れてクリーヴドン（サマセット州の海辺保養地。ロセッティが愛した土地でもある）に、健康がすぐれないため、でも病氣というわけ

はない、ただひどく疲れた、と逃げ口上をいって身を隠した。とかくするうち一八六九年一月、「事件」は急転、友人を巻き込む大騒動となった。

マリーがバーン＝ジョーンズに駆け落ちか、それとも心中かを迫ったのだ。この間の事情を、ロセツティはいささか無責任、多分に野次馬的にフォード・マドックス・ブラウン（一八二一—一九三）に、「内密の事」とわざわざ断って、こんな手紙を書いた。⁵¹

ネッド「バーン＝ジョーンズのこと——引用者注」の一件、気の毒だが、完全におじゃんになった。とんだ騒動のあげく、ネッドとトプシ「モリスのこと——引用者注」はローマへ不意に姿をくらましてしまった。後に残されたギリシャ娘は、ネッドの友人の家を手当たりしだい捜しまくって、ぎゃあぎゃあ喚いたが、だれもマリーを相手にしなかったそう。ジョージはずっと控えたまま。ところが、今日、小耳に挟んだ所によれば、トップ「これもモリスのこと——引用者注」とネッドはドゥヴァーまで行き着く前に、ネッドが急に体調を崩し、ロンドンに戻るより仕方がなくなったそう。……とうとうマリーはアヘンチンキを二人分用意して、ロード・ホランズ・レインでネッドに決着をつけようと迫った。彼女がブラウニングの家の前面の運河で水死を図ろうとしたとき、ネッドは何が起こつていうのかわからなかった。思い止どまらせようとして、女と石畳を転げているところを、警官がネッドの首根っこを押さえたという。で、その後は有耶無耶。

またロザリンド・ハワードはこんな風に「事件」を記した。⁵²

聞くところによると、Z夫人は、ジョーンズが駆け落ちを拒否すると、毒入りの瓶をポケットから取り出して、今ここでこれを飲みます、と凄んだものだから、大騒動になった——Jが瓶を引ったくろうとする——警官がくる——同時に彼女のかつての友人であるルーカス・アイオニーズが現れて、警官に事情を説明、Z夫人を連れて立ち去った。ジョーンズはその場を離れ、そこで気絶——御定まりの結末——わたしの感じでは、アイオニーズが彼女が何を企んでいるかを見届けようと後をつけてきたところが、あの有り様、怒りと嫉妬にかられて、二人の関係をばらしたのではないかと思います。

ところでこのハワード夫妻、つまりハワード一族とは、ナワース・カースルを本邸とする貴族、カーライル伯爵家である。ナワース・カースルはモリスに言わせれば、イングランド中でいちばんロマンチックな建物だった。当主ジョージ・ハワード（一八四三—一九一一）は第九代伯、ケンブリッジ大学、トリニティ・カレッジ出身、イースト・カンバーランド選出自由党議員、アマチュア画家でもあった。その政治的立場はモリスの共鳴するところであり、東方問題協会に関与するより早い一八六七年夏ころから、文通を始めた間柄だった。それにハワード夫妻のロンドン邸宅はフィリップ・ウェップの建築であり、ステンドグラスをはじめ内装をモリス商会が手掛るなど、すでに浅からぬ関係があった。友人二人の苦境に心を痛めハワード夫妻は、余人をもつて代えがたい助言者・救済者となった。時にはロザリンドがグレンジ邸を訪れて、ジョージアーナを厳しく詰問することもあったらしい。そんな時、彼女は一方的にまくし立て、相手の欠点をあげつらい、ほとんど喧嘩腰だったという。⁵⁾

それでも、もしこの二人がいなかったならば、あるいはロセッティのような野次馬的傍観者ばかりだったら、バーンズ・ジョーンズ夫妻にとって「事件」の進展も「事件」の後遺症も随分と違ったものになっていただろう。

ジュデイス・フランダーズは、「ロザリンドだけが、ジョージアーナの友人のなかでただ一人、実際上の援助ならどんなことでもした、ジョージアーナの味方だった」、とコメントした。ジョージアーナもロザリンドが誠実な味方であることが分かっていて、随分彼女を頼りにした形跡がある。例えばロザリンドの日記の断片が語るように「ジョージとふたりだけで話し合った。精神的にひどくまいっていて、苦しんだ様子。彼女が言うには、結婚生活にはいろいろ人様の耳には入れたくない事情がいくらかもある。だからといって、いちいち周囲の同情を求めているのは、妻として夫に桶突いているように受け取られるでしょうから、どうしても口に出せなかったのです」⁽⁶⁾。彼女は惨めさをあくまで自分の胸のうちに納めておこうとした。それに引き換え、エドワード・バーン・ジョーンズは、一切を絶対秘密に言いながら、モリスとウェップとロセッティとハウエルの四人に口外した。これにはジョージアーナも我慢ができず、娘二人を連れて、クリーヴドンの時と同じように一カ月以上も、今度はオックスフォードへ緊急避難を断行した。その時、頼りにしていたロザモンド・ハワードに、いかにもジョージアーナらしいというべきか、自己放棄ともいえるこんな痛々しい手紙を書き送った。⁽⁶⁾

面倒な人間関係は当事者同士どんな言葉をもってしても説明がつくものではありません。事のありようをまとめて、明きらかに見えるようにすることができるのは神だけです。貴女がわたしの言うなりに受け入れてくださり、間違っているとお考えになっても判断を差し控えて、許してくださいましたことを知っています。貴女を愛しているゆえに、このことに大変感謝しております。それでも、わたしが相変わらず問題によつては寡黙で退屈であつても我慢してくださいますように。……あわせて、どんなことでも、わたしの助けになるとお考えであれば、直接間接ためらわずにお話しくくださいますように。わたしには助けが必要です。人間ほとんど誰し

もそうですが、わたしも至らぬことがあるのを承知しています―わたしの行いはすべてがごく単純な些細な理由に基づくものです。……それを神がどのようにお考えかわかりませんが。

最愛のロザリンド様、今回のことでだれも咎めたり、ほめそやしたりしないでください。願わくは最後に万事うまく収まりがきますように。ただ分かっているのは一つのこと、それはエドワードとわたしの間には、神がふたりに恵んでくれればのことですが、長い人生の最後まで持続するに足る愛があるということですよ。

騒動の後もバーン・ジョーンズはマリー・ザンバコをモデルに、周囲からなじられることに耐えながら絵を描き続けた。リンジーによれば、この騒ぎは少なくとも一八七二年まで尾を引いたという。『エドワード・バーン・ジョーンズの回想の記』はこの件に関して当然ながら一言も触れていない。マッケイルがモリスの感情的側面に立ち入るのを差し控えざるをえなかったように、ジョージアーナも口を閉ざしたのだ。ただ、きわめて暗示的に、「この頃、わたしたちがロンドンのいわゆるギリシヤ人集団と言っている人々の一端に紹介されたことは記憶しておいてよいことであつた。これ以前にも、ギリシヤ総領事の娘である美貌のミス・スパルタリとその妹さんと面識をえる光榮に浴していたが、こんどは、どういふ経緯だつたか記憶にないが、やはり一、二のギリシヤ人一家とも知り合いになつた」と第一五章に記しているのだが、「記憶にない」どころか、思い出すのも忌まましき経緯だつたはずである。一八六八年から一八七一年を扱つた第一六章のエピグラフがすべてを語っている―「ああ、ここにゐる貴方とわたしは悲しさと孤独のふたり」

三月、ジョージアーナはグレンジ邸に戻る。七月、ハワード家のカントリ・ハウス、ナワース・カースルに滞在、静養につとめた。秋、マリーは、画家が最早ジョージアーナと別れてくれないことを知って、屈辱ともいえる

舞台となったロンドンからパリに戻った。バーン・ジョーンズ夫妻は危機を脱した。ジョージ・ハワードやモリスやウイリアム・グレサム（バーン・ジョーンズのパトロン）などの常連が戻って来た。ゲイ・ダリは「彼女は、自分の不幸という些細なことを越えた、すばらしい芸術作品をエドワードが制作できるように夫を支え、擁護した。エドワードもそれに応えて、妻の尽力を認め、その誠実と心遣いに感謝した」と書いた。¹¹ こうして画家は代表作といえる一点を完成することさえできた。《欺かれるマーリン》（あるいは《マーリンとヴィヴィアン》、一八七〇—一八七四）である。

この大作（182.9 × 109.2 cm）はアーサー王伝説に由来することは周知の事実だが、「画家が直接画想をえたのは、テニスンの一二篇の物語詩から成る大作『国王物語詩集』の一篇「マーリンとヴィヴィアン」（一八五九）からであった。画家お気に入りの題材で、生涯に五回とりあげ、絵筆をふるった。『詩の本』に収められた「生と死」の挿絵もそのうちの一点である。王アーサーとその宮廷に怨念をいだく策謀にたけたヴィヴィアンは、マーリンをオークの古木に永遠に閉じ込めてしまう。鎖のような大樹の枝にからまれて横たわる囚われのマーリン。画面は森の中の緊迫した瞬間を不気味な空気のうちに捉らえて、マーリンの叫びが聞こえてくるようだ。画家は、女性を描いて、男性を誘い欺く支配者とした。マーリンを蔑むようにその場を立ち去ろうとするヴィヴィアンを蠱惑的な姿態の立ち姿に描き、背後に横たわる欺かれた受け身のマーリンを水平像に描いた。通常の男女間の力関係の逆転である。モデルは W・J・スティルマン（サンバコに並ぶもうひとりの美女、ファムファタール）だったにしても、このような作図にこめた画家の意図はおのずと明らかである。

《マーリンとヴィヴィアン》は《欺かれるマーリン》の題名で、一八七七年にボンド・ストリートに誕生したグローヴナー美術館の開館記念美術展に出品された。新美術館は、絵画の伝統よりも画家の独創性や精緻な職人芸を

重んじた。また展示については、従来壁面全体に所狭しと出品を並べたアカデミーの陳列法を廃して、ゆつたりしたスペースを確保する、ことに天井近くなど見にくい場所に展示はしない、絵と絵の間隔は六インチから一二インチ離す、作品にはできるかぎり望ましい光線が当たるよう配慮するなど、画期的な運営方針を掲げた。公募を取り止め、美術館側からの指名招待によったことも新機軸だった。出品者はバーン・ジョーンズ、ワッツ、ホイットスラー、ミレー、レイトンら七人だった。なかでもバーン・ジョーンズは最多の八点を発表した。ヘンリ・ジェイムズは『ギャラクシー』八月号で、オズカー・ワイルドは『ダブリン大学マガジン』七月号で、バーン・ジョーンズを絶賛した。新美術館で脚光を浴びた画家の名は大陸にまで広がった。ジョージアーナは、その頃のエドワードについて、「彼はそれまでとはまったく違った世界に所属することになった。その存在は広く知られ、有名人になった」と記録した。

一方、モリスを取り囲む現実とは？ D・G・ロセッティとの愛人関係（一八六七年あるいは六八年～一八七五年）に続く、ジェインのもうひとつの「不誠実」がモリスを痛みつけていた。それはロセッティが一八八二年に世を去った後の一八八四年からと確定できるW・S・プラントとの新たな関係である。ジェインのプラント宛て手紙が一四五通も現存する。現在われわれが入手できる文献、P・フォークナー編『J・モリスのW・S・プラント宛書簡』（一九八六）、『W・S・プラントとモリス夫妻』（一九八一）、およびケルヴィン編『書簡集』を加えて、ジェインのもう一つの「不誠実」をたどる。

ジェインが二人目の恋人となる男性に出会うのは、ロセッティが死んでほぼ一六カ月後の一八八三年八月である。場所はカンバーランド州（現ノーサンバランド州）のナワース・カースル、その住人ロザリンド・ハワードか

ら招待を受けたジェインが滞在中の出来事だった。ロザリンド夫人はどんな動機からだったのか、もしかしたら、ロセッティ亡き後のジェインの寂しさを慰めるつもりだったのだろうか、それともどこか胡散臭さのあるブラントから懇請があったのだろうか？ どうも後者であったと考えられる。いずれ後述することになるはずで、今はともかくもジェインをW・S・ブラントに引き合わせたとだけ言っておこう。後から考えると、随分罪作りなことをしたと思う。モリスはひとりロンドンに居た。彼はまだブラントと面識はない。

ブラントはウェスト・サセックス州の出身。陸軍士官学校卒業後、外交官となり、バルカン諸国、中近東を旅した。なかでもサウジアラビア北部のナフード砂漠を夫婦で横断、首長に迎え入れられた教寄の冒険譚は、世間に奇矯の人を印象づけた。マーシユは「一八八〇年代と九〇年代のイギリスの政治状況からいうと、裕福な異端者であり、……本質的にはロマンティックな保守主義者の立場から……帝国主義を攻撃しながらも、急進派だけでなく社会主義者の政策とも手を組んでいた」⁽¹⁹⁾。どこか日和見主義者の印象もぬぐえない。また無類の好色家として艶聞の絶えなることなく、好奇的のにさらされ続けた。その中には数々の公爵夫人、そしてそこにはロザモンド・ハワードの名もみえかくれする。愛人の一人にされるところだった。一八七二年春のこと、彼はハワード伯爵夫人のなにをどう勘違いしたのか、性急な行動に出て肘鉄を食らったのだった。後、八〇年代になって、兩人は昔日の感情の復活を懐かしんだが、もう手遅れだった。ロザリンドがジェインをブラントに引き合わせる、いわば女衞の役を買って出たのはちょうどその頃のことだった。

図 8 W.S. ブラント 1880 年頃。

父親の漁色家ぶりを娘ジュディスは（のちレイディ・ウェントワス）「父は女性について、まるでチェス・ゲームのポーンなどの駒のように、意のままにいくらでも取り替え、投げ捨て、操ること自在と冷笑的な見方をしていました」と批判したが、これを引用したF・マッカーシーは「いささか誇張があるが、そうとばかりは言えない」と間接的に肯定した。反面、詩人として政治詩、恋愛詩を書き（モリスはケルムスコット・プレスからプラント詩集を出版した）、アラブ馬の飼育にも奔走した。また、アイルランド土地同盟をめぐる活動が罪に問われて投獄された。プラントにつきまとう「女性誘拐や姦通」の悪評は、妻アンが詩人バイロンの系譜につながる貴族出身の女性であったことと無関係ではなかったろう、とマーシユは考える。そんな趣向・性癖のプラントにとって、ラファエル前派の盟主ロセッティの美の靈感となったジェイン・モリスは、ほかのだれよりも際立った、気にかかる女性だったはずである。たとえ一〇カ月ほどの年上であったとしてもである。ロザリンドの紹介でジェインに近づきえたプラントは、ハマスミスのケルムスコット・ハウスを訪問したり、自邸にジェインを招待したりした。やがて、ジェインはプラントを夫に引き合わせた。

ジェインによるプラント宛て手紙の現存する最も早い例として、しばしば一八八四年七月六日付け手紙⁽¹⁵⁾が取り上げられる。ケルヴィンもこの手紙に注目して、書簡集の序言で「正確にいつ恋人同士になったかわからない」としながらも、二人は「多分一八八五年二月頃までには、恋人同士だったろう」とかなり断定的な言い方をした。ただし、「この手紙の趣旨はまことに散文的で、社会主義雑誌『今』にエジプト問題に関する記事をプラントに依頼するのが目的」だったと解説する。

しかし、その頃のモリスは社会主義をめぐって、自分の活動基盤を定めることに腐心していた。六月一四日に民

主連盟のハマスミス支部を立ち上げたばかりだったし、バーナド・シヨーと知り合ったのもこの頃のことである。だから、編集者の依頼からとは別に、モリスが面識をえたばかりのブランドに妻をかいして、社会主義雑誌『今』の原稿の依頼をしたということもまた十分成り立つことである。

だが、そのいずれにせよ、ほんとうに原稿依頼を目的にした、ただそれだけの手紙なのだろうか？ なるほど「素っ気ない」文面ではあるが、気にかかるのが最後の二行である。「参考になると思い、『今』の七月号を一部お送りします。／こんどお目にかかるのはいつになるでしょうか？」用件が済んだ後に、改行して追記そのものようにこの二行が続くのである。控え目だが、好意のひとかけらが、いやそれ以上の思いがここにはある、と考えたら思い過ぎだろうか。ジェインの念頭にあったのは、たんに次回の事務的打ち合わせのための日取りを尋ねた、ただそれだけだったのだろうか。どうもそうとは思われない。ただ、ピーター・フォークナーは、「最も早い時期のこの手紙には、恋愛感情の気配は皆無だが、ただ最後の問いかけだけが、もしかしたら、それなのかもしれない」と最後の一行にこだわりをみせた。

事務的依頼と読んだケルヴィンは、この手紙をジェインの政治的関心を示すものと受けとめ、ジェインはそうした問題には疎いという大方の意見にやんわり異議を唱えた。ブランドとのやりとりに関する限り、疎いどころか、なかなか積極的ですからある。彼が保守党员として立候補することになったとしても、彼のために選挙運動をしましょう、あるいはアイルランド自治問題のために彼がおこなった演説をべたほめするなど、政治的現実について、まるで別人であるかのように、夫モリスに対するのは違った熱心さ、表明の仕方をみせた。

ジェインはその後、七月下旬に招かれ、サセックスのブランド邸クラベット・パークを訪問する。気後れと緊張に終始した訪問だったけれども、たいへん楽しいひと時を過ごすことができた札を綴り、同時に返礼として彼をハ

マスマシスの自邸に招待した。そして最後に一行「もしよろしければ他日またお訪ねしたいと思います」と重要なメッセージをこの時もまた書き添えるのを忘れなかった。恋人同士はけっしてデートの可能性を断ち切って別れてしまつてはいけないのである。もちろん、ブランドは招待を受け入れて、マスマシスを訪ね、モリスとの初対面を果たしたのだった。

ブランドの日記、一八八四年七月二十九日には「マスマシスを訪問、モリス夫人と彼女の亭主と数時間を過ごした。……モリスの家の庭は花一杯で、ことにセキチクがすばらしい古風な庭である。その都会から離れた庭が気に入った、どこよりも個人的な庭である」と訪問の第一印象を記した。⁽¹⁹⁾それにマスマシスの庭で写したジェインの美しい、一八八四年という日付の写真が添えられている。

その頃ブランドに送ったジェインの手紙（八月六日付）にこんな魅力的な一通がある。ケルムスコット領主館での生活を「とても快適な毎日です。一日の大半を庭で過ごすか、川縁りで読書をしたりしています。ここではじめて見る野の草花がたくさんあります。読書と仕事とおしゃべりで一日が過ぎて行きます。……さようなら、スコットランドからお便りがいただけるなら、ヘザーをちよっぴり送ってくださいーそれと、たまにはわたしのことを思い出してください」⁽²⁰⁾優しい筆遣いが印象的で、ここでも最後の一行がやはり「ひとかけらの好意」を、いや、今や恋心にも近い思いを、さりげなく、しかし真剣に伝えている。

一八八五年、聖ヴァレンタインの日、ジェインはこんな手紙をブランドに送った。「わざわざ長い手紙をくださらなくても、一言近況をお知らせくだされば、それで結構です。しきりに貴方のことを思い、お目にかかって、お話しをして、ご一緒にこうした溪谷を散歩できたら、と願っています。もちろん、叶わぬこと馬鹿げたことであるのは重々承知の上です。それでも、一所懸命追い払おうとするのですが、そんな思いが繰り返しおこってきて、腹

が立つやら戸惑うやらしています。ヴァレンタインのスマイルを明日お贈りしたいと思ひます」⁽²¹⁾ ヴァレンタインにちなんだ愛の告白か。

ジェインはこれをイタリア、ボルデイゲラの町、ベルヴェデーレ・ホテルで投函した。ブランドの日記（二月二九日）には「いつていらつしゃい、を言うため、モリス夫人を訪問。二、三カ月イタリアに行くとのこと。彼女にはまだ美しい女性である瞬間があるが、もつと昔の彼女を知っていたらよかつたのと思う」⁽²²⁾ というブランドらしい記述。じつは娘ジェニーが激しい発作に見舞われ、母親の言によれば、「発狂寸前のところ」⁽²³⁾ だったらしい。けつきよくジェニーはモールヴァン療養所に行くことになって、ジェインは娘のメイを連れて（仕事に忙殺される夫をロンドンにのこしたまま）、しばしイタリアに静養することになった。こうした夫婦の乖離（このときばかりではない）を分析して、ケリヴィンは、「モリスが社会主義運動に東奔西走しながら、つねに暗い影を負っていたのは、妻がブランドと恋人同士であることを承知していたからだ⁽²⁴⁾」と考えた。

二人の親密度が加速する、ブランドは、ロセッティ気取りで、ジェイン賛歌の詩（どのような詩であったか、P・フォークナーは特定できなかったと記す）を贈る。ジェインの感謝感激の礼状、苦手と考えていた詩行に自分でも信じられないくらい感興を覚えるジェイン、一八八五年七月には、土砂降りのなかをハワード家のもう一つのカントリ・ハウス、カースル・ハワードに旅をするふたり、その夏ブランドに寄せた手紙には「昨日はテイデインンまで船で往復、それから庭で静かな時を、貴方がここに居た時のことを思い浮かべながら過ごしました—この小さな空間には貴方の影がつきまといます。庭に出ると、かならず貴方の声や姿に出会うのです。空蟬の貴方はいつ姿を見せてくれますか？ 明日から三日間午後完全に空いています—いちばん早い水曜日がわたしのお好みです。いずれの日がよろしいか、ご都合をお知らせせください。ああ！今は庭が荒れ地そっくりです。花一輪見当たりませ

ん」⁽²⁵⁾一八八七年秋、ブランド夫妻はアイルランドを旅行、西部のゴールウェイ州ウッドフォードで強制立ち退き反対集会に参加、その席上公務執行妨害で拘束され、翌八八年三月までゴールウェイおよびダブリンのキルマナン刑務所で服役という難事に見舞われた。

一八八八年七月一日、娘の見舞いで滞在するモールヴァンから、ジェインはブランドに手紙を書く、「今までの予定で一三日か一五日に行くのです。もしその間二、三日滞在をご希望なら、夫に手紙を書いてください—ケルムスコット宛てに。……わたし自身はもつと後に行くつもりですが、ジェニーが居ないときでないためです」⁽²⁶⁾こうしてブランドは一八八八年一〇月はじめて領主館を訪問する。日記では一八八九年となっているのだが、ピーター・フォークナーによれば、二人の関係をくまますためだったろうと推測する。領主館に滞在中、ブランドは獄中で書いた詩のゲラ刷り校正をつづけたが、「僕に恋するモリス夫人がシヤムロックの葉を図柄に表紙のデザインをしてくれた」と記録した。ブランドはジェインのこの装丁が気に入った。ちなみに三つ葉のシヤムロックは三位一体を象徴してアイルランドの国花、クローバに酷似した野の草である。

一月八日付けケルムスコット・ハウスから、エジプトの別邸に滞在中（恒例の避寒）のブランドに宛てたジェインの手紙はいつもの「親愛なるブランド様」(My Dear Mr Blunt)に代わって、「親愛なるわたしのあなたへ」(Caro mio)という例外的書き出しで、「この部屋にわずか数日前貴方がいらしたとは信じられません、とても遠いことのように思えるのです。イギリスにいらっしゃる時のもつとしげくお会いしたいものです。……封筒の表に懐かしい貴方の筆跡を見るだけでも他にかえがたい励ましです。太陽に恵まれた土地で、たまにはわたしを思い出してください—変わらぬ最も親愛なる者より」⁽²⁷⁾

こうして一八八九年を迎える。P・フォークナーは「ブランドとジェインの恋愛関係の頂点を画した年だろう」と重要視する。またジャン・マーシユは一八八八年秋頃が「二人が性的な面での関係が始まった時期としてもっとも可能性が高いように思われる。……全般的に見て残念なことは、ブランドとジェインの情事についてはブランド自身の記述しか利用できないことである。というのも、彼のことだから、虚栄心からどのように彼女を征服したかを誇張して書いたとしても仕方ないからである。しかし、自分とジェインが充実した肉体関係を享受したという彼の言い分を疑う理由も一見したところなにもないのである」と書いた。⁽²⁸⁾

その年の夏のブランドの日記に次のような記述が見つかる。日記はかなり削除された形で公開されている。だから、それはケルムスコット領主館を訪ねた日の、モリス一家についての思いやりをこめた訪問記にすぎなくて、無削除の全文とは印象がまるで異なる。そのことを、P・フォークナー編『ジェイン・モリスのウィルフリッド・スコーエン・ブランド宛ての手紙、併せてブランドの日記抜粋』（一九八六）が採録した無削除文を以下にやや長い⁽²⁹⁾がここに全文を引用したい。（文中傍線は削除部分）。

家庭生活のモリスは多忙をきわめていて、身の不幸を感じたりする暇もなく、それに旺盛な活力の持ち主、過去の失望にくよくよしているわけでもなかった。それでも、幾多の失望が彼のものとならざるをえなかった。若いとき恋愛結婚をしたが、妻は彼を愛することがついぞなかった。志が強く情愛の深い彼はその愛情をひたすら二人の子供に注いだ。下の娘メイは、父親が認めない、本人も愛してもいない取り柄のない社会主義者と無分別な婚約をしまい、才知に恵まれた上の娘ジェニーは幼いときから彼の自慢の娘であったが、頭脳を酷使して、今は癲癇性の発作に悩んでいた。あるときハマスマシスの居間でジェニーと母親と一緒にお茶を楽し

んでいた時、この悲しむべき症状に襲われた場面を目撃したことがあって、突然、ジェニーが仰向けに倒れ、頭をキャビネットに強打したのです、モリスとロセッティが若いときに装飾画として、リンカーンの聖ヒューの蘇りを描いたあの有名な最高に美しいキャビネットにです。今、ケルムスコットでモリスが家庭での愛情を一心に注いだ対象である、この哀れなほとんど精神を狂わせた娘に対する気遣いを見るにつけ、胸がひどく痛む思いがした。彼は妻に対して、つとめて同じように優しく振る舞ってはいたが、それでも、いかにも彼らしいある意味手放しの流儀でジェニーにみせる優しさとは別物であった。彼女は愛すべき気品のある女性であったが、決してその心に触れることができなかったのを知っていた。だからといって、彼はもの見えぬ人間ではなかった。妻とロセッティの間でなにが起こっていたか、知っていたし、許してもいた。しかし、忘れてではなかった。彼がわたしのことを、嫉妬にもひとしく、怪しんでいた―われわれの親密な関係は表立って説明するほどのことではなかったのに―と考えたことがあった。われわれを二人だけにしておきながら、なにかしらの口実で不意に二人のいる部屋に戻ってきたことは一度や二度ではなかった。しかも馬鹿みたいに大きな足音を立てたりして、まるで抑えがきかぬ疑心暗鬼を恥じ入っているかのような振る舞いだった。なんでもないと分かれると、気前がいい彼のこと、彼女にもわたしにもけろっとしていた―だがやっぱり訳ありだったのだ。

こうした削除をふくむ、ジェインへの言及をことさら避けた（と思われる）文面を、P・フォークナーは、先述した領主館への初訪問を一八八九年としたこととあわせて、二人の関係への巧妙な目眩ましとした。ブランドはケルムスコット領主館について、こんな遠慮のない、というか暴露的なことを書いた。⁽³¹⁾

ケルムスコットは夢の多い家だが、全部屋がそのままひと続きで、ブライヴァシを保つのが困難な、住み心地のよくない家であった。一階ほどの部屋も庭に面したいわゆる通路をかねた部屋ばかりで、広く低いから外から中が丸見えだった。わたしの寝泊まりした部屋もあるときはそういう部屋のひとつで、またあるときは二階の一室だった。それも母屋と使用人区画を結ぶ通路部屋であった。全員が夜寛ぐ二階の居間はタベストリの間で、モリス個人の寝室を通り抜けなければ、たどりつけない袋小路になっていた。……モリス夫人は階段を登った右手の小さな通路の行き止まりの部屋を寝室にしていた。床はすべてカーペットが敷いてなく、軋んだ。昼間は窓から差し込む日の光で古い家も幸せな生気にあふれていたが、夜の暗闇のなかでは、人の気配が筒抜けな、不気味な物音にみちみちたお化け屋敷みだった。……一四年ほど前、ロセッティとジェインが愛の時間を過ごしたのもこの場所だった―で、わたしは自分がロセッティの賛美者であり、ジェインの恋人の跡継ぎであることをつくづくと思うのだった」

あるいは、しばしば引用されて広く知られる、こんなブランドによるモリス評がみつかる。「わたしがこれまで親交を結んだ大人物のなかで、モリスは知的面で最強の人間と思う。さまざまな事柄に対して驚くほどの確かな把握力、とてつもない広範囲の知識の持ち主だった。……ただ一点、モリスは女性の愛情についていろいろ書いていながら、じつは知らないのではないか、と思う。彼はこのことだけは議論をしたがらなかった。この点、彼は本当の経験をしていない、依然として子供なのだ」⁽³⁾

モリス夫人とブランドとの組み合わせをどう受け取ったらいだろう。双方向の関係として成り立った組み合わせ

せだったのだろうか、それとも、彼女は策士の手練手管に言いなりになった、ある意味で被害者だったのか。ジェインの手紙とブラントの手記の検証から推察すると、どうも二人の間には温度差があつて、執心のジェインとそれを記録しただけのブラントという関係が浮かび上がってくるように思われる。事実、ブラントの手記には、どんな場合にも「モリス夫人」で通して、ジェインに呼びかけるのにクリスチアン・ネームを使つたためしはない。ジェインに愛していると言つた記憶もない、などと書く。色欲に溺れるような関係でありながら、それがぼくの全思考を占有したことは決してなかつたし、ぼくを不幸にするだけの威力もなかつた、とさえ言う。

ブラントはジェインを愛したのではなかつたのか。ジェインにむかつて、彼女とロセッティの三角関係に対して異常な関心を剥き出しにした。そんなブラントの関心と記述に窃視者的な偏向を指摘したのはF・マッカーシである。モリスが気後れを感じる事柄について、ブラントは逆に執拗な詮索を試みた。モリスが欠いたものをブラントは多分に持ち合わせていた。ブラントの目には、モリスは女性に話しかけるのも、熟練の大工に話しかけるのも一緒だった、と映つた。ジェインはもっと愛情の機微にふれたしつとりした情緒に飢えていたかもしれない。庭で自作の詩を読んで聞かせてくれるとか、敵意剥き出しの砂漠のベドウィン族との冒険譚を英雄気取りで語ってくれるとか、杏の樹に囲まれたピンク色に輝くエジプトの邸宅の話とか、もうそれだけで一晩のうちにいくらでも親しくなれる、そんな予感がほしかつたのかもしれない。ブラントの、時には多分に芝居がかつたこともあつたはずの情熱にジェインは惹かれ、時には熱烈に求めもしたのである。そしてジェインは、ああ、これはロセッティとの時間の再来ではないか、と思つたにちがいない。

一八九〇年のブラントの日記から――

五月一三日―庭のベンチに座つて、彼女はロセッティについてこれまで以上にいろいろと話をしてくれた。文通

は結婚前から、よくモデルをしたけれども、その頃セックスを求められたことは一度もありませんでした、早い時期の手紙は沢山処分しましたが、それでも手元にはまだ一〇年分の手紙が残っています——「恋文」です。とても美しい恋文でした、と彼女は言った。

五月三〇日——この三日間クラブに滞在。モリス夫人と娘のメイと一緒に。

八月二一日——月曜からここケルムスコットに滞在、以前と同様毎日が静かに過ぎて行く。……ジェニーは幾度も発作を起こす。ますます痩せて顔色もよくない。……モリス夫人は久しぶりに元気で、往年の美しさが表現しようもない魅力とともに戻ってくる時がある。

一〇月一八日——昨日はモリス夫人と一緒にだった。本当に二人だけの打ち解けることができた時だったが、これが最後だろうと思う。あの女も同じ思いで、そう口に出したが、それには反論しなかった。(しかし、その「最後」は最後ではなかった)

一八九二年の日記から——⁽³⁴⁾

五月五日——ハマスミスにモリス夫人を尋ねる。暗い古い家に数時間滞在。ロセッティの話をした。すごく愛していたのかどうか尋ねると、「ええ、はじめはね、でも長くは続かなかったんです。〔以下鉛筆書きで〕」続いている間はほんとうに夢中でした。

七月五日——きのうケルムスコットへ出掛ける。申し分ない見事な夕方、庭のバラが奇跡のようだ。モリスと夫人とジェニーと一緒に日暮れまで散歩。「以下鉛筆書きで」皆が出掛けた後、ジェイニー「ジェインのこと——引用者注」と一時間一緒に過ごす。

八月二一日——あいにくモリスは留守。でもモリス夫人とジェニーが在宅。モリス夫人と寝る。あれこれロセッ

テイのことをふくめて過去の話をしてくれた。「一度も体を許したことはありません、今みたいにです」とジェイン。もし許していたら、彼だってあんな風に命を断つことなんかなかったかもしれない。

一月一二日―ロセッティの書簡の貴重な束がモリス夫人からメモと一緒に届いた。「私の死後五〇年がたつまで公開禁止」と特記された小生の手紙と一つにしておくことと書かれていた。³⁵

一八九三年の夏、ブランドはジェインとの関係を終わりにする時と考えていたかもしれない。七月、ケルムスコットに妻子を連れて滞在したブランドは「モリス夫人は随分と老けた。わたしが五三歳なのだから」と書いた。³⁶翌月、再訪したブランドのために、ジェインはいつものようにパンジーを一輪、彼の寝室において、軋む廊下の先にある自室を促した。ブランドは花に気がつきながら、彼女の「促し」を無視して、「別に喧嘩をしたわけではない、年齢がかさんでいつのまにやら距離ができた。……こんな風にして、愛はいともたやすく、激しい痛みもともなわず、枯死していくものなのだ」³⁷と二人の関係をいかにもブランドらしく、なにか得意げに総括した。

それでも一八九四年の夏まで、二人の時間は、「人も羨む友情、……思いやりのない、不用意な言葉のひとつやふたつでは壊れるはずもない、すばらしい価値ある友情」³⁸として継続する。ジェインとブランドの手紙のやりとりも続く。しかし、話題は天気、ジェニーの体調など身辺雑記といえる気軽なおしゃべりが中心だった。夏が終わる頃から、ジェニーの看護と心労が主因となってジェインはとうとう体調を崩した。医者は冬に備えて三ないし四カ月の長期転地療養をすすめる。生活全体へのつかみ所のない深刻な不安を滲ませた文面が目立つようになる。鬱病ではないかとさえ疑心暗鬼になる。ブランドは「ロセッティの死んだ後、九年か一〇年前もし僕が彼女を慰める立場にいなかったら、ジェインはもっと早く精神病院に入っていたのではないか。珍しいほど不平不満を口にしない人なのに、そうでないのは、きつとピンチでいるのに違いない。……カイロに來ればいいものを、少しは僕が役に

立つだろうから」結局、カイロ行は実現せず、代わりにジェインはイタリアのボルデイゲラに出掛けた。³⁹⁾

ブラントのジェインへの執心は、先述したように、モリス夫人が長い間、彼が英雄視したロセッティの詩や絵画に靈感を与え続けた女性だったからである。ロセッティを英雄像として描くブラントの心情はバイロンを英雄視し、その孫娘アンを妻にしたことにも通じる。後に知り合ったモリスにも英雄像を重ねることになり、そうした「友情」はモリスの最後まで続いた。

ブラントにモリスの訃報を伝えたのはジョージアーナだった。一〇月三日に亡くなったという。九月二八日にブラントはモリス夫妻と夕食をともしたばかりだった。その日の日記に「彼はまるで墓場から抜け出して来た男のようだった。テーブルにちよっとの間座っていたが、なにか虚ろで、会話を追うこともできなかった」とモリスの激しい衰弱ぶりを記したばかりだった。それに続く一〇月四日の日記「モリスが死んだ。今朝、レディ・バーン || ジョーンズからその旨の手紙を受け取った。夫人いわく、『わたしたちの親愛な友が今朝一時二〇分過ぎ亡くなりました。ちょうど赤児が母親の腕に抱かれて眠るような静かな最後でした』」これに続けて、ブラントは以下のような追悼の言葉を綴った。⁴⁰⁾

絶望とは思っていたが、考えていたより早かった。それでよかったのだ。モリスは知る限りもつとも素晴らしい人物である。手掛けている仕事にだけ熱中して、どんな事にも誰に対しても自分をふくめて、まったく眼中におかなかった。だからといって、自分だけの利益や快楽や安心を求めるといふ意味での利己主義者ではなくて、自分の思いに没頭するあまり、愛情を外に出したり、親切を行為で示すことに苦手だった。

彼は真の愛情をバーン・ジョーンズにいただき、二人は絶えず会い、日曜日の午前はいつも一緒に過ごした。娘のジェニーに優しい、そして妻子に対してすばらしい父であり夫である姿を目にしたことがある。しかし、会っていない時、はたして家族のことを大事に考えていたかどうか、それに彼の人生は家族とのかかわりで成り立っていたかどうか怪しいと思う。彼が関与しない世界に対してまったく無関心であったようにみえるし、僕の思いやりには彼はけつして答えてくれなかったのは確かと思っている。彼はわたしと話をすることを好んだが、それはこちらが彼との話の仕方を心得ていたからである。われわれの言葉の垣根は彼の機知を磨くことになったが、しかし決して道の向こう側から声をかけてくるようなことはなかった。人付き合いは寛大、気前がよく、困窮する人々に金銭の面で数々の親切を施したと思うが、男であれ女であれ、誰に対しても悩み通すということはなかった。誰にも自分の時間の内一時間を割くつもりもなかった、と言うのが真実だろう。だから、世をあげて彼を褒めたたえ、尊敬を惜しまなかったが、沢山の友人がいたかどうかは怪しい。全部数えても半ダースではなからうか。わたしは随分親しくしたし、彼を愛していたけれども、自分が彼の友人の中に入っているか疑わしい。ジェニーにとって大きな悲しみ、ジェインにとって大きな痛手、ひろく世人にとって大きな喪失となるだろう。モリスは真にわれわれにとって最も偉大な人物だったのだから。

葬儀に参列した後、ブランドがケルムスコット領主館に行ってみると、「モリス未亡人が喪服ではなく、普段の青色のショール掛けて、いつものように二階でソファに身を横たえていた。髪の毛はすっかり白髪になっていた。わたしは久しぶりにキスを与えて、精一杯のお悔みをいった。『恐ろしいことですけれど、不幸だなんて思っていない』、そう彼女は言った、『なにしろ物心ついてから、ずっとあの人といっしょでしたから。結婚したとき一八

歳でした―でも愛したことはありませんでした』⁽⁴¹⁾ ジェインは夫と死別直後に、すでに元恋人と行ってよいブラントに、なぜこんな風に言わなければならなかったのだろう。

葬儀の三日後、ジェインはメイを連れてブラントの家に滞在、一月中旬にはブラントからエジプトの別荘へ招待があつて、やはりメイと一緒に旅した。別荘はブラントが新しい愛人レディ・メアリ・ウィンダムのために建てた、ピンク・ハウスの通称がある砂漠のなかの邸宅だった。ブラントは日記に「モリス夫人の来訪は期待外れだった。……二人とも馬はおろか、ロバにも乗ろうとしなかった。……ここにおいて乗馬抜きでは生活は成り立たない。砂が深いから歩くわけにはいかない。そんな訳で二人とも終日家に籠もりきり。日に二度会うことは会うが、二人をどう楽しませたらいいか、途方に暮れている。二人にセックスを求めるときにはいかないし、だったら外にどうしたらいいんだ」⁽⁴²⁾と書いた。

そして、ブラントはどうしたかというところ、ひとり砂漠旅行に旅立ってしまった。残された母娘はなんの娯楽もない場所に、それでも一冬を過ごし、ようやく四月ロンドンに戻った。二人の帰国の日のブラントの日記（一八九七年四月五日）、「今日、モリス夫人と娘のメイがイギリスへ帰国。……イタリヤ経由で帰って、夫人は夏をケルムスコットに滞在する。趣味のない老年は寂しいから、ケルムスコットで酪農場を始めることを薦めた。僕と同年の五六歳。メイとは話をしたり、意見の交換をすることなど一度もなかったが、ジュデイスが仲良しになって、息が合い、アラビア語を教えたり、戦鬪的社会主義とはまた別の人生観を教えたりした」⁽⁴³⁾

そしてジェインは、モリスなきあとも、ブラントと文通を続けた。一八九七年五月八日の手紙、「体調芳しくないとのこと、悲しく思います。わたしもあの恐ろしい船旅の後遺症にまだ悩まされています―医者とは来週は外へ出ることもできるでしょう、と希望を持たせてくれますが、どうなることやら。ロンドンへお帰りになりましたら、

貴方様の食堂へわたしを迎えていただけることでしよう——あまり階段の上り下りもできませんが」⁽⁴⁴⁾
それから一〇年以上も経って一九一三年五月二十三日、ジェインはプラント宛に最後となる手紙を書く。⁽⁴⁵⁾

貴方と同じように鉛筆を使う羽目になりました。その方が疲れが少ないのです。……だから私も離れてひどく殺風景な冬を過ごしました。ロンドンのメイの所へ行くはずだったのですが、娘が麻疹に罹ってしまったので、代わりにタンブリッジ・ウエルズへ行きました。自動車ではるばる貴方様にお目にかかるうと考えたのです。でも天気がひどくて、そんな考えも諦めました。……ちようど今貴方のアイルランドに関する本を読み終えたところです。本当におもしろくて夢中になって読みました。来年、アイルランド自治の実現が期待されているかと思うと、ほんとうに不思議な気がします。三〇年近く経ってもなんの成果も得られなかったというのにです——人間の野蛮なこと、なんとという恐ろしい話でしょう——もしわたしの生まれがアイルランド人だったら、全イギリス人を憎むと思います。秋、ロンドンに戻っていれば、お知らせします。

ジェインのこの世を去る前年の手紙である。ジェインは体調を崩してはいたが、まだ死の予感はない。最後の手紙となったが、ジェインの心情としてはまだまだ二人の付き合いは終わらない、そんな余韻を漂わせる結句である。

【注】

主要文献には以下の略記を用いた。

- ・FM → Fiona MacCarthy, *William Morris*, Knopf, 1995.
 - ・GBJ → Georgiana Burne-Jones (G.B.J), *Memorials of Edward Burne-Jones*, 2 vols, Macmillan, 1909.
 - ・JL → Jack Lindsay, *William Morris*, Constable, 1975.
 - ・JM → Jan Marsh, *Jane Morris*, Pandora Press, 1986.
 - ・JW → J. W. Mackail, *The Life of William Morris*, 2 vols, Longmans Green and Co., 1912.
 - ・LD → Linda Parry (ed.), *William Morris*, Harry N. Abrams, 1996.
 - ・MM → May Morris (ed.), *The Collected Works of William Morris*, 24 volumes, Longmans Green, 1914.
 - ・NK → Norman Kelvin (ed.), *The Collected Letters of William Morris*, Princeton University Press, vol. 1, 1848-1880, 1984; vol. 2, 1881-1888, 1987; vol. 3, 1889-1896. ケーン・ケルビン 書翰集の全巻を指す。
 - ・PF → Peter Faulkner (ed.), *Jane Morris to Wilfrid Scaven Blunt*, University of Exeter, 1986.
 - ・PFB → Peter Faulkner (ed.), *Wilfrid Scaven Blunt and the Morrises*, William Morris Society, 1981.
 - ・PH → Philip Henderson, *William Morris—His life, Work, and Friends*, MacGraw-Hill, 1967.
 - ・RM → Rosie Miles, "William Morris and the Gift of A Book of Verse", Peter Faulkner & Peter Preston (eds.), *William Morris—Century Essays*, University of Exeter Press, 1996.
 - ・WSP → William S. Peterson (ed.), *William Morris, The Ideal Book*, Univ. of California Press, 1982.
- ◆ ウィリアム・モリスの自撰詩集『詩の本』
- (1) MM, vol. 9, p. xviii.
 - (2) RM, p. 134.
 - (3) William E. Fredeman (ed.), *Correspondence of Dante Gabriel Rossetti*, vol. 2, p.147.
 - (4) MM, vol. 9, p.xx-xxi.
 - (5) FM, p. 264.
 - (6) LP, p. 296
 - (7) MM, vol. 9, p. xxii.

- (8) LP, p. 308.
- (9) MM, vol. 9, pp. xxi-xxii.
- (10) 現在もっとも普通に参照可能な版本は1980年のファクシミリ版である。ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の協力のもとにスコラ・プレスにより製作された。部数は限定325部、うち300部を販売した。限定番号1〜62はヴェラム装。ファクシミリ版には同博物館長(当時)ドクター・ロイ・ストロングの序言および同館図書館副館長J・I・ヴェイリの解題が付された。今回参照できたのは京都女子大学蔵書(限定293番)である。
- (11) MM, vol. 9, p. xxvi.
- (12) 同右書, p. xxviii.
- (13) NK, 書簡 118a.
- (14) MM, vol. 2, pp. xxiv-xxvi.
- (15) NK, 書簡 120b.
- (16) RM, p. 141.
- (17) MM, vol. 9, pp. xxxiv-xxxviii.
- (18) WSP, p. 64. 初出は *Arts and Crafts Essays* (1893) に所載のエッセイ "Printing" (pp. 111-133)。ただし、モリスとエマリー・ウォーカー両人の署名。翻訳に川端康雄訳『理想の書物』(筑摩書房, 1992) / ちくま学芸文庫 (2006) がある。
- (19) 同右書, pp. 65-66.
- (20) RM, p. 134.
- (21) 小野二郎『ウィリアム・モリス研究』、著作集1(晶文社, 1986), pp. 127-128.
- (22) 寿岳文章「ケルムスコット・プレス」(『英米文学史講座』第9巻(研究社, 1961), p.155.
- (23) JWM, vol. 1, p. 285.
- (24) PH, p. 115.
- (25) MM, vol. 9, p. xxi.
- (26) 同右書, p. xvii.
- (27) 同右書, pp. xxiii-xxiv.

◆モリス夫妻とジョージアーナ・バーンズ・ジョーンズ

- (1) JM, p. 96.
- (2) William Morris の講演, "The Prospects of Architecture", (1888)。「先程、満足していますか、と皆さんに問いかけましたが、どうも寧ろではないように思われます。……50年前、30年前、いや20年前には、こんな問いはナンセンスだったでしょう。一方的な答えが返ってくるだけだったのです。大満足であるところは今、なにかしら手を打たなければだめだ、と考えていることだけは確かかなようです。……ところが、この問題を真正面から見据えるとき、……新たな芸術の誕生を実現するには困難と誰しもが考えるのです。というのも、現状と来るべき将来の間には、なにか空恐ろしい生き物が存在するのです、言ってみれば火の川のような。対岸に泳ぎつこうとするだれもが苛酷な試練を思い、本来真理への希求とあなたに待ち受ける幸福な日々への深い思いから、飛び込むことを恐れるはずもない人々までが怖じけづいてしまうのです」(JM, vol. 22, p. 131)
- (3) JL, pp. 167-168. こうしたリンジーの判定には、ケルムスコット刊本『折々の詩』(1891)に収められた、激情的な、時には官能的な詩句をまじえた「庭の雷鳴」(MM, vol. 9, pp. 154-155)も有力な根拠となったのではないか。6月の驟雨と雷鳴が束の間休止する夏の庭、「わたしの指にからんだ彼女の指が／不安げな愛撫でもってわたしから初めての贈り物として／わたしの優しさを求めた」。
- (4) 同右書, p. 183.
- (5) 同右書, p. 186.
- (6) 同右書, p. 185.
- (7) 同右書, p. 186.
- (8) 同右書, p. 187.
- (9) PH, p. 92.
- (10) RM, p. 141.
- (11) *A Book of Verse*, (Scholar Press, Facsimile Edn, 1980), p. 3.
- (12) NK, 書簡95。(1899年10月とあるのみで正確な日付はなし)。
- (13) NK, 書簡97。
- (14) JL, p. 168.
- (15) NK, vol. 1, p. xxxix.

- (16) JL, p. 187.
 (17) GBJ, p. 73.
 (18) 同右書, p. 97.
 (19) NK, 書簡 251。
 (20) GBJ, p. 74.
 (21) FM, p. 379.
 (22) GBL, pp. 83-84. なお、「目覚めよ、ロンドンの若者たち」の5番までの全歌詞はNK書簡480（ジェイン宛て手紙）に付された注を参照。1番の冒頭4行は「目覚めよ、ロンドンの若者たち、目覚めよ、大胆に自由に／立ち上がれ、仕事にかかれ／イギリスの栄光がトルコの／奴隷とならないために／……」
 (23) Philip Henderson (ed.), *The Letters of William Morris to his Family and Friends*, (Longmans, Green & Co. 1950), pp.388-389.
 (24) NK, 書簡487。
 (25) 同右書, 書簡488。
 (26) 同右書, 書簡497。
 (27) 同右書, 書簡660。（一部が残るのみ）。
 (28) 同右書, 書簡710。
 (29) 同右書, 書簡720。
 (30) 同右書, 書簡730。
 (31) JWM, vol. 2, p. 24.
 (32) NK, 書簡 960の注2。
 (33) 同右書, 書簡710の注3。
 (34) JWM, vol. 2, p. 15.
 (35) NK, 書簡480。
 (36) PH, p. 277.
 (37) JM, p. 187.

- (38) NK, 書簡959。
 (39) 同右書, 書簡810。
 (40) JWM, vol. 2, pp. 78-79。
 (41) JWM, vol. 1, p. 338。
 (42) JM, p. 142。
 (43) NK, 書簡835。
 (44) 同右書, 書簡839の注2。
 (45) 同右書, 書簡903。
 (46) 同右書, 書簡906。
 (47) JM, p. 144. 1877年3月の古建築物保護協会 (Society for the Protection of Ancient Buildings, SPAB) の設立が始まりだった。1883年、モリスは社会主義団体である民主連盟 (Democratic Federation, 翌年、社会民主連盟 Social-Democratic Federation と改称) に参加、社会主義者であることを公言、一層現実参加へのめり込む。しかし、労働組合や政党を結成するようないわば専従的職業的立場を苦手としたモリスは、翌年12月には社会民主連盟を脱退、社会主義同盟 (Socialist League) をあらたに結成する。しかし、それにも無政府主義的過激さを嗅ぎ付けると、すばやく脱退、今度は1885年1月、ハマスミス社会主義同盟 (Hammersmith Socialist League) を名乗る地元組織を立ちあげた。『ユートピア便り』を発表したのもその機関紙上である (1890)。それに全300回を数えたといわれる超過密の講演活動が加わった。この間、「東方問題 (協会)」へのコミットもあった。目もくらむような慌ただしさである。
- (48) NK, 書簡943。
 (49) 同右書, 書簡1512の注1。
 (50) 同右書, 書簡1512。
 (51) PF-1, p. 19.
- ◆モリス夫妻とウィルフリッド・スコーエン・ブランド
- (1) Judith Flanders, *A Circle of Sisters*. (Penguin Books Ltd, 2001), p. 120.
 (2) Gay Daly, *Pre-Raphaelites in Love*. (William Collins, 1990), pp. 283-284.

- (3) (4) (5) (6) Judith Flanders, 前掲書⁷⁾ p. 122.
- (7) 同右書⁷⁾ p. 123.
- (8) 同右書⁷⁾ pp. 123-124.
- (9) JL, p. 153. *Martin Harrison & Bill Waters, Burne=Jones*, (Barrie & Jenkins, 1979) に於ては、1898年から1911年までの総説を、*スウェーデン* p. 96.
- (10) GBJ, vol. 1, p. 303.
- (11) Gay Daly, 前掲書⁷⁾ p. 299.
- (12) 同右書⁷⁾ vol. 2, p. 75.
- (13) JM, p. 188.
- (14) FM, p. 448.
- (15) PF-1, p. 2.
- (16) NK, vol. 1, p. xxxii.
- (17) 同右書⁷⁾ vol. 2, p. 399.
- (18) PF-2, p. 9.
- (19) PF-1, p. 3.
- (20) 同右書⁷⁾ pp. 3-4.
- (21) 同右書⁷⁾ p. 5.
- (22) PF-2, p. 11.
- (23) PF-1, p. 4.
- (24) NK, vol. 1, p. xxxiii.
- (25) PF-2, p. 16.
- (26) 右書⁷⁾ p. 19.
- (27) 同右書⁷⁾ pp. 20-21.
- (28) 同右書⁷⁾ p. 21.
- (29) JM, p. 193.

- (30) PF-1, pp. 29-30.
- (31) 回右書¹ p. 31.
- (32) W. S. Blunt, *My Diaries: Being a Personal Narrative of Events 1884-1914*, 2 vols. (Secker, 1919-1920), Pt. 1, p. 25.
- (33) PF-2, pp. 24-27.
- (34) 回右書¹ p. 30.
- (35) PF-1, p. 74.
- (36) FM, p. 651.
- (37) 回右書¹ p. 652.
- (38) PF-2, pp. 29-30.
- (39) PF-1, p. 71.
- (40) W. S. Blunt, 複製書¹ Pt. 1, pp. 240-241.
- (41) PF-2, p. 39.
- (42) PF-1, p. 107.
- (43) PF-2, p. 40.
- (44) PF-1, pp. 107-108.
- (45) 回右書¹ pp. 132-133.

【図版出典】

- ・ 図1— Linda Parry (ed.), *William Morris*, Harry N. Abrams, Inc., 1966.
- ・ 図2¹・ 図3— William Morris, *A Book of Verse*, (Facsimile Edn.) 1980.
- ・ 図4¹・ 図5— Norman Kelvin, *The Collected Letters of William Morris*, vol. 2, Princeton University Press, 1984-1989.
- ・ 図5²— Norman Kelvin, 図4²書¹ vol. 1.
- ・ 図6— Jan Marsh, *Jane and May Morris*, Pandora Press, 1986.
- ・ 図7— Martin Harrison and Bill Waters, *Burne-Jones*, Barrie & Jenkins, 1973.

